スラブ・ユーラシア研究センターニュース　季刊　2015年春号

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 141 May 2015

研究の最前線

◆ GCOE プログラム「境界研究の拠点形成」が最高評価を得る ◆

BRIT XIV フランス・ベルギー大会での岩下教授（2014 年 11 月）。GCOE 終了後もセンターは UBRJ を軸に境界研究の日本の拠点として活動しつづけています

2014 年 3 月で終了しました、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」の採択拠点事後評価結果が、この度、日本学術振興会のホームページにて公表され、「設定された目的は十分達成された」という、4 段階評価での最高評価を得ました。人文・社会科学系の大型プロジェクトは総じて事後評価で苦戦する傾向がありますが、本プロジェクトは活動のすべての側面について高い評価をいただくことができました（詳しい事後評価の内容は日本学術振興会のホームページをご覧ください：http://www.jsps.go.jp/j-globalcoe/08_kekka.html）。これはひとえにプロジェクトにかかわっていただいた皆様のご尽力の賜物であります。心より感謝申し上げます。北大における境界研究はセンターの境界研究ユニット（UBRJ）へと引き継がれておりますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。［岩下］

◆ 2015 年度夏期国際シンポジウム“Russia and Global History”の予告 ◆

今年度の夏期シンポジウムが 7 月 30 日（木）～31 日（金）にセンター大会議室でおこなわれます。ICCEES 世界大会で来日されるベテランと新進気鋭の歴史家を中心に、近現代世界におけるロシアの位置を考えるものになります。とはいえ、ロシア研究者の自己満足になってはいけませんので、討論者にはイギリス帝国研究とオスマン帝国研究の第一線で活躍される方々をお招きしました。プログラムの作成過程でサンクトペテルブルグ・ヨーロッパ大学の Samuel J. Hirst 氏の御助力を得、また現在副学長でいらっしゃる Boris Kolonitsky 氏をお招きできましたので、ヨーロッパ大学が共催となっています。

シンポジウム前日の 29 日夕刻には、共同利用・共同研究拠点事業の「中央ユーラシア・ムスリムの歴史・社会に関する共同研究班」の枠で、海野典子さん（東大院）が特別にセッションを組んでくれました。また、シンポジウム後の 8 月 1 日には助教の高橋沙奈美さんが、「社会主義の記憶と現在：宗教・政治・ナショナリズム」をテーマにセミナーをおこないます。ドイツ・ブレーメン大学の N. Mitorokhin 氏、U. Huhn 氏、および昨年センターに外国人特任教員として滞在されたジョージタウン大学の I. Papkov 氏ら現代正教研究の第一人者の研究成果が報告される貴重な機会になる予定です。この二つにも振るってご参加ください。以下、プログラムです。［長縄］

Thursday, July 30

10:00–10:15 Opening Remarks

10:15–12:15 Session 1: Between Imperialism and Colonialism: Imperial Rivalry and Politics on the Ground

David Schimmelpenninck van der Oye (Brock University, Canada)
"The Kashgar Question: St. Petersburg, Tashkent and Yakub Beg"
Alexander Morrison (Nazarbayev University, Kazakhstan)
"Competitive Emulation and Anglo-Russian Rivalry in the Conquest of Central Asia"
Paul du Quenoy (American University of Beirut, Lebanon/SRC)
"The First Russian Consul in Beirut: K. M. Bazili in Action, 1839-1854"
Discussant: Yasu'o Mizobe (Meiji University)
Chair: Tomohiko Uyama (SRC)

13:45–15:45 Session 2: Cross-cultural Stimulation: Russia's Globalizing Economy

Ekaterina Pravilova (Princeton University, USA)
"Not by Bread Alone: Russia and the Global Market of Cultural Goods"
Igor Khristoforov (Higher School of Economics, Russia)
"Professors and Bankers: Russian Economic Thought and the Formation of the Modern Financial System in the Nineteenth Century"
Yukimura Sakon (Niigata University)
"Great Game of Tea: Russian Tea Trade in the Late Nineteenth Century and Early Twentieth Century"
Discussant: Shigeru Akita (Osaka University)
Chair: Shinichiro Tabata (SRC)

16:00–18:00 Session 3: Russia at the Crossroads: Human Mobility Across Empires

TBA
Philippa Hetherington (University of Sydney, Australia)
"Laboratory of Migration: Historicizing Mobility in the Black Sea Region"
Norihiro Naganawa (SRC)
"Russia's Place in the Global Muslim Connections, ca. 1800-1930: Sufism, Nationalism, and Anti-Imperialism"
Discussant: Hidemitsu Kuroki (Tokyo University of Foreign Studies)
Chair: So Yamane (Osaka University)

Friday, July 31

10:00-12:00 Session 4: Divided Communities: Russian Revolution and the World

Boris Kolonitsky (European University at St. Petersburg, Russia)
"The February Revolution of 1917 as a World Revolution"
David McDonald (University of Wisconsin-Madison, USA)
"1917 and Its Impact on the First 'Russia Abroad': Immigrant Communities in Canada, 1917-1925"
Taro Tsurumi (Saitama University)
"Russian Jews after the Imperial Collapse, East and West"
Discussant: Satoshi Mizutani (Doshisha University)
Chair: Kiyohiro Matsudo (Hokkai-Gakuen University)

13:30-15:30 Session 5: A Wide Arc of Activity: The Soviets' Transformative Role in the Interwar East

Samuel J. Hirst (European University at St. Petersburg, Russia)
"National Economics: Soviet-Turkish Trade in the Interwar Period"

Yaroslav Shulatov (Hiroshima City University)
"Japan's Place in Soviet Far Eastern Policy during the 1920s"
Sören Urbansky (Ludwig Maximilian University of Munich, Germany)
"'The Border is under Lock and Key': Ritualistic Reaffirmations of the Manchurian-Soviet Border during Times of Conflict"
Discussant: Harumi Goto-Shibata (Tokyo University)
Chair: Shinji Yokote (Keio University)

15:45-17:45 Session 6: Cold War and Decolonization: The Soviets' Role in the Postwar East
Masha Kirasirova (New York University Abu Dhabi, UAE)
"The Politics of Economic Spectacle: Soviet Trade Pavilions and Cultural Exports in the Middle East, 1953-1968"
Artemy M. Kalinovsky (University of Amsterdam, the Netherlands)
"Central Asia's Cold War: Anti-Imperialism and Models of Development"
Jun Fujisawa (Waseda University)
"In Pursuit of Natural Resources: The CMEA Policy of 'Coordination' in the Developing Countries"
Discussant: Ichiro Maekawa (Soka University)
Chair: Manabu Sengoku (SRC)

◆ 共同研究員 ◆

2015 年度から 2 年間の任期で、センター共同研究員になっていただく方々は以下のとおりです（五十音順）。［事務係］

共同研究員

赤尾光春（大阪大）、秋山徹（早稲田大）、阿部賢一（立教大）、飯尾唯紀（城西大）、池田嘉郎（東京大）、諫早勇一（名古屋外国語大）、井上まどか（清泉女子大）、岩﨑一郎（一橋大）、岩本和久（稚内北星学園大）、上垣彰（西南学院大）、上野俊彦（上智大）、海野典子（東京大）、江淵直人（北大低温科学研究所）、大串敦（慶應義塾大）、大塚夏彦（北日本港湾コンサルタント㈱）、大西富士夫（日本大）、大野成樹（旭川大）、岡奈津子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、小澤実（立教大）、貝澤哉（早稲田大）、加藤美保子（日本学術振興会特別研究員）、加藤有子（名古屋外国語大）、亀山郁夫（名古屋外国語大）、久保慶一（早稲田大）、後藤正憲、小松久男（東京外国語大）、小森宏美（早稲田大）、金野雄五（みずほ総合研究所㈱）、左近幸村（新潟大）、佐々木史郎（国立民族学博物館）、塩川伸明（東京大学名誉教授）、篠原琢（東京外国語大）、志摩園子（昭和女子大）、下里俊行（上越教育大）、下斗米伸夫（法政大）、白岩孝行（北大低温科学研究所）、新免康（中央大）、朱永浩（ずうよんほ）（福島大）、杉浦秀一（北大メディア・コミュニケーション研究院）、杉本良男（国立民族学博物館）、鈴木淳一（札幌大）、髙尾千津子（東京医科歯科大）、高倉浩樹（東北大）、巽由樹子（東京外国語大）、楯岡求美（神戸大）、田畑朋子、月村太郎（同志社大）、鶴見太郎（埼玉大）、徳永昌弘（関西大）、鳥山祐介（千葉大）、中井遼（立教大）、中田瑞穂（明治学院）、中地美枝、中野潤三（鈴鹿国際大）、中村唯史（京都大）、長與進（早稲田大）、西山克典（静岡県立大）、沼野充義（東京大）、根村亮（新潟工科大）、野田仁（早稲田大）、野中進（埼玉大）、乗松亨平（同志社大）、橋本聡（北大メディア・コミュニケーション研究院）、濱本真実（日本学術振興会特別研究員）、林忠行（京都女子大）、平田武（東北大）、廣瀬陽子（慶應義塾大）、樋渡雅人（北大経済学研究科）、福田宏（愛知教育大）、藤嶋亮（國學院大）、前田弘毅（首都大学東京）、松里公孝（東京大）、松戸清裕（北海学園大）、溝口修平（東京大）、三谷惠子（東京大）、宮崎悠（北海道教育大）、六鹿茂夫（静岡県立大）、望月恒子（北大文学研究科）、本村真澄（独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構）、森下嘉之（茨城大）、谷古宇尚（北大文学研究科）、湯浅剛（広島市立大）、横手慎二（慶應義塾大）、吉村貴之（早稲田大）

地域比較共同研究員

辛嶋博善、川島真（東京大）、高本康子（大谷大）、小松久恵（追手門学院大）、佐藤隆広（神戸大）、武田雅哉（北大文学研究科）、立石洋子（日本学術振興会特別研究員）、丸川知雄（東京大）、毛里和子（早稲田大学名誉教授）、守川知子（北大文学研究科）、山根聡（大阪大）

境界研究共同研究員

安渓貴子（山口大）、石井明（東京大学名誉教授）、井澗裕、今野泰三（特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター）、大西広之（法務省）、北川眞也（三重大）、北村嘉恵（北大学教育学研究院）、佐道明広（中京大）、佐藤圭史、樽本英樹（北大文学研究科）、池炫周直美（北大公共政策学連携研究部）、中居良文（学習院大）、中山大将（京都大）、前田幸男（創価大）、舛田佳弘（日本文理大）、山﨑幸治（北大アイヌ・先住民研究センター）、山本順司（北大総合博物館）、吉見宏（北大経済学研究科）、渡邉浩平（北大メディア・コミュニケーション研究院）

◆　公開講座「動乱のユーラシア：燃え上がる紛争、揺れ動く政治経済」開催中　◆

2014 年以来、ウクライナや中東などユーラシアのさまざまな地域で紛争が起き、ロシア、EU 諸国、中国などの政治経済も波乱含みです。そこで今年度の公開講座では、センターが旧ソ連・東欧はもちろんユーラシア諸地域の研究に関して持っているネットワークを活かして専門家を招き、各地で起きている紛争や政治経済変動の背景と影響を解説してもらうことにしました。初回の講義では、パレスチナ問題についてよく予習してきた受講者の方々から多岐にわたる質問が出て、大変盛り上がりました。［宇山］

日　程		講　義　題　目	講　師
第 1 回	5 月 11 日（月）	ガザ戦争後のパレスチナ：長引く紛争に翻弄される人々	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授　錦 田 愛 子
第 2 回	5 月 15 日（金）	中国経済とどうつきあうか：アジアの繁栄をともに維持するために	学習院大学経済学部 教　授　渡邊真理子
第 3 回	5 月 18 日（月）	「ムハージルーン（移住者）」を通して見るコーカサスのイスラーム復興	北海道大学大学院文学研究科 専門研究員　立 花　優
第 4 回	5 月 22 日（金）	イスラーム国の脅威と国際社会	日本エネルギー経済研究所中東研究センター 副センター長　保 坂 修 司
第 5 回	5 月 25 日（月）	東と西の狭間で：揺れ動く中東欧	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教　授　仙 石　学
第 6 回	5 月 29 日（金）	ウクライナ紛争とロシア経済	ロシア NIS 貿易会ロシア NIS 経済研究所 研究員　井 澗　裕
第 7 回	6 月 1 日（月）	ウクライナ危機と「イスラーム国」の波紋が重なる中央アジア	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教　授　宇 山 智 彦

◆　国際セミナー「ロシア北極圏の持続的発展」の開催　◆

2015 年 1 月 31 日（土）に、虎ノ門 HILLS（東京都港区虎ノ門、第 2 秋山ビル）2 階ホールで、国際セミナー「ロシア北極圏の持続的発展」が開かれました。このセミナーは、日本学術振興会の日本とフィンランドの二国間交流事業共同研究プロジェクト「ロシア最後のエネルギー・フロンティア：極北地域の持続的発展への挑戦（Russia's final energy frontier: Sustainability challenges of the Russian Far North）」主催によるものです。

会議のもよう

この研究プロジェクトは、石油・ガスの開発や北極海航路の進展によって期待されているロシアの北極圏地域の発展が、持続可能なものであるかを検討することを目的として、2014年9月からスタートしました。具体的には、石油・ガス開発や北極海航路の現状と課題を調査・分析するとともに、北極海における環境保全や国際的なルール作りの問題を検討するものです。日本側はスラブ・ユーラシア研究センターを拠点とし、フィンランド側は、ヨーロッパで有数のロシア・東欧地域を研究する研究機関、アレクサンテリ研究所（Aleksanteri Institute）を拠点としています。昨年9月にヘルシンキのアレクサンテリ研究所でキックオフ・ミーティングをおこなって以来、今回が初めての本格的な会合となりました。当日のセミナーは、プロジェクトのメンバーの他に、協定校との学術交流に対する北海道大学からの助成によって、サンクトペテルブルグ国立大学から2名の研究者が参加しておこなわれました。会場には研究者やジャーナリストのみならず、実業界や官庁など幅広いエリアから総勢約70名が来場し、フロアを埋めました。

本セミナーは二部構成でおこなわれました。「北極圏の持続可能なガバナンスに向けて」と題した第Ⅰセッションでは、北極圏を巡って様々な立場に立つ周辺各国の利害が交錯する中で、どのような秩序が構築されるべきかという問題について議論が交わされました。まず、ラップランド大学のラッシ・ヘイニネン氏が、グローバル化が進む現在の社会情勢の中で北極圏地域の抱える矛盾点を指摘し、この地域の持続的発展を優先課題として関係各国が協調することの必要性を訴えました。続いてサンクトペテルブルグ国立大学のアレクサンダー・セルグーニン氏は、ロシアの対外政策立案者の立場から、現地の資源開発と環境保全の両立に向けたガバナンス強化の道筋を示しました。さらに日本大学の大西富士夫氏は、昨今のウクライナ情勢が北極圏地域の国際関係に及ぼす影響について指摘した上で、北極圏の政治的安定を保つために各国の協力体制を引き出す秩序作りの可能性について、報告をおこないました。

第Ⅱセッション「北極圏におけるエネルギーの開発と輸送」では、エネルギー資源とその輸送に関する、よりプラクティカルな問題に踏み込んだ報告がなされました。まず、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の本村真澄氏が、北極圏オフショアの資源開発について詳細なデータをもとにおこなった分析の結果を報告した上で、そこで日本が果たすべき役割について課題と展望を述べました。次に、当共同研究のフィンランド側の代表者、アレクサンテリ研究所のヴェリ＝ペッカ・ティンキネン氏が報告し、ロシア国内の再生可能エネルギー利用を含むエネルギー政策には、土地の地理的・地政学的環境に応じて地域差があることを示しました。また、北日本港湾コンサルタントの大塚夏彦氏は、北極圏で採掘される天然資源の輸送ルートとして注目の集まる北極海航路について、有用性とその課題を明晰なデータ分析に基づいて解説しました。

各セッションでは、早稲田大学の池島大策氏、海洋政策研究所（OPRF）の北川弘光氏が、それぞれ専門的な見地からコメントをおこない、北極圏ガバナンスにおける中国のプレゼンスのあり方や、北極海輸送の安全管理上の問題について、より踏み込んだ指摘がなされました。各報告に対してはフロアからも積極的に質問の手があがり、この分野における一般的な関心の強さが示されました。

また、当日は本セミナーに先立って、若手研究者セッションが開催され、当該テーマに関して意欲的な研究をおこなっている 3 名の若手研究者による研究報告の場が設けられました。

この二国間共同研究プロジェクトは来年夏まで継続しておこなわれ、今後もその成果を順次発信していきます。［後藤］

◆　国際シンポジウム　◆
“Slavic Minorities and Their (Literary) Languages in the European Context and Beyond: The Current Situation and Critical Challenges” 開催される

2015 年 1 月 30 日（金）～ 31 日（土）に、早稲田大学にて標記の国際シンポジウムが開催されました。本シンポジウムはセンターとゲント大学スラブ・東欧研究センターとの共同主催でおこなわれました。このシンポジウムは、1989 年の東欧革命以降から今日までに活発化したスラブ人マイノリティの言語状況の変遷と現状について、特に文章語の形成の諸問題に注目し、多角的に分析することを目的としています。

シンポジウムは、チェコの著名な学者 Geroge Marvan 氏の基調講演に始まり、合計 10 ヵ国からの参加者による 12 の報告がおこなわれました。報告者の多くは言語学者で、多くはスラブ語を専攻する研究者でしたが、より広いヨーロッパの文脈からロマンス語の類似事例として「ミランダ語」についても報告がおこなわれました。それに加え現地で活躍する実務者による現状報告もおこなわれるなど、さまざまな立場による有意義な意見交換の場になりました。本シンポジウムの報告集は、ディーター・シュテルン（ゲント大学）、ボヤン・ベリッチ（ワシントン大学）、野町（センター）の共編で Otto Sagner 社から刊行予定です。

当日のプログラムは以下をご覧ください。［野町］

January 30th (Fri.)

Motoki Nomachi (Hokkaido U) Opening Remarks

Keynote Lecture

Speaker: George J. Marvan (Charles U in Prague, J. E. Purkyně U) “Łysohorsky’s Poetic Lachian: A Museum Exhibit or a Message for the Future?” Chair: Motoki Nomachi (Hokkaido U)

Session 1. Languages Emancipation in the Balkans

Evangelia Adamou (French National Centre for Scientific Research) “Why Pomak Will Not Be the Next New Literary Slavic Language and Why This Matters”

Motoki Nomachi (Hokkaido U) & Bojan Belić (U of Washington) “Issues in Southeast European Language Emancipation”

Chair: Masumi Kameda (U of Tokyo); Discussant: Dieter Stern (Ghent U)

Session 2. Issues of Corpus Planning

Mira Načeva-Marvanová (J. E. Purkyně U) “Electronic Corpora of Slavic Micro-Languages at Their Threshold: The State of the Art and Its Further Prospects”

Jan Maksymiuk (Independent scholar) “The Development of a Latin Spelling System for Podlachian”

Chair: Satoshi Hashimoto (Hokkaido U); Discussant: Yukiyasu Arai (Hokkaido U)

January 31st (Sat.)

Special Presentation 1.

Dieter Stern (Ghent U) “The Privacy of Having a Language of One’s Own: Slavic Regional Standard Projects and Minority Agendas Online” Chair: Bojan Belić (U of Washington)

Session 3. Linguistic Situations in Eastern Slovakia Today

Konstantin Lifanov (Lomonosov Moscow State U) “The Language of the Eastern Slovakia Landmarks of the Writing System from Modern Perspective” (in Russian)

Chair: Satoshi Hashimoto (Hokkaido U); Discussant: Susumu Nagayo (Waseda U)

Session 4. Micro-literary Languages in European Context

Satoshi Terao (U of Tokyo)
"The Possibility of the Mirandese Language as a Model for the Establishment and Promotion of Lesser-used Minority Languages"
Madlena Norberg (U of Potsdam)
"The Maintenance of Lower Sorbian in Brandenburg"
Chair: Keiko Mitani (U of Tokyo); Dicussant: Goro Christoph Kimura (Sophia U)
Special Presentation 2.
Jaromira Labudda (Linia School)
"The Kashubian Education Yesterday and Today"
Chair: Motoki Nomachi (Hokkaido U)
General Discussion and Closing Remarks
Chair: Dieter Stern (Ghent U)

シンポの懇親会にて

◆　マリヤン・マルコヴィッチ教授のマケドニア語に関する連続講演会　◆

日本スラヴ学研究会での講演会のようす

3 月 20 日および 24 日に、キリル・メトディウス名称スコピエ大学（マケドニア）の言語学者マリヤン・マルコヴィッチ教授の講演会がおこなわれました。マルコヴィッチ氏はマケドニア語方言学およびバルカン言語学の専門家で、特にロマンス系の少数話者言語であるアルーマニア語とマケドニア語の言語接触の研究で知られ、また「スラヴ言語地図」や「ヨーロッパ言語地図」などの重要な国際プロジェクトでも活躍しています。

マケドニア語を含めたバルカン半島のスラヴ諸語は、多言語併用の環境で複数の言語が接触を繰り返した結果、他のスラヴ諸語とは大きく異なる言語構造を獲得したことで知られています。今回の講演は、特にマケドニア語とアルーマニア語を題材に、現在も進行する言語構造の変化について分析するものでした。質疑応答では、言語変化に関する討論だけではなく、マケドニア語やアルーマニア語の方言文学についても議論されるなど、充実したものとなりました。

なお、3 月 20 日の講演会は日本スラヴ学研究会の特別講演会も兼ねました。組織にご協力くださった研究会の関係者の皆様にお礼申し上げます。［野町］

日　時：2015 年 3 月 20 日（金）（1 回目）
会　場：早稲田大学 1 号館 401
講　師：Prof. Dr. Marjan Markovik' (University "Ss. Cyril and Methodius" of Skopje, Faculty of Philology "Blaže Koneski")
題　目：The Aromanian and Its Contacts with Macedonian (from Balkan Perspective)

札幌での講演を終えてお寿司で一息

日　時：2015 年 3 月 24 日（火）（2 回目）
会　場：スラブ・ユーラシア研究センター大会議室
　　（4 階 403 号室）
講　師：同上
題　目：Macedonian Language Tendencies in Balkan Context

◆　ワルシャワ大学の研究者来訪　◆

3 月末にワルシャワ大学ポーランド学部長ズビグニェフ・グレン教授および同学部一般言語・東アジア・バルト学科のロムアルド・フシチャ教授が来日されました。グレン氏は主に西スラヴ諸語の研究者として知られ、現在はシロンスク地方の言語問題について、言語学、社会学、文化人類学など様々な視点から学際的に研究しておられます。フシチャ氏は日本のポーランド関係者にはもはや紹介不要ですが、東アジア諸語およびスラヴ語研究で数多くの業績をあげておられる研究者です。

SRC 図書館を訪問したグレン氏

今回お二人は北海道大学とワルシャワ大学の大学間協定に関連して来日され、東京と札幌と合わせて計 3 回のセミナーがおこなわれました。グレン氏は上記のシロンスクをテーマに、フシチャ氏はポーランド語における英語の影響について講演されました。いずれも盛会に終わり、日本におけるポーランド研究への関心の高さが見て取れるものとなりました。なお、東京では両氏と野町（センター）がツィリル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国大使と面会し、ワルシャワ大学との協定締結について報告し、今後の交流について話し合いました。今後も協定に基づきワルシャワ大学との積極的な学術交流が予定されています。

なお、今回のセミナー組織に関しまして、ポーランド広報文化センターのヤロスワフ・ヴァチンスキおよび久山宏一両氏に大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。［野町］

ズビグニェフ・グレン氏の講演会
日　時：2015 年 3 月 27 日（金）
会　場：在日ポーランド共和国大使館
題　目：現代中欧におけるエスニック・アイデンティティの生成－シロンスクを題材に
日　時：2015 年 3 月 29 日（日）
題　目：近縁エスニック集団の境界におけるアイデンティティ：ポーランド・チェコ・スロヴァキア三角地帯のケース

ロムアルド・フシチャ氏の講演会
日　時：2015 年 3 月 29 日（日）
題　目：現代ポーランド語における言語間接触の記号学

講演するフシチャ氏

◆ UBRJ: Association for Borderlands Studies 年次大会開催される ◆

4 月 8 日～11 日、アメリカ・オレゴン州ポートランドにて Association for Borderlands Studies 年次大会が開催されました。UBRJ からは岩下明裕ユニット代表、デイビッド・ウルフ（スラブ・ユーラシア研究センター教授）、池直美（公共政策大学院講師）、地田徹朗（スラブ・ユーラシア研究センター助教）が参加し、アメリカ西海岸での開催にもかかわらず、日本からは大会参加者数の 1 割を超える総勢 16 名がポートランドの地で研究報告をおこないました。本大会より、岩下ユニット代表は 1 年の任期で ABS 会長に就任し、同理事会で ABS の新しい試みとして地域チャプターをつくるアイデアが提案され、その最初のトライアウトとして北大・UBRJ が九大アジア太平洋未来センターと共同で日本チャプターづくりを手がけることが承認されました。UBRJ が主導する今後の国内外での境界研究の展開にご期待ください。［岩下／地田］

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

2 月 19 日：**岩下明裕**「図説ユーラシアと日本・ボーダーミュージアム」第 2 章および「国境の島・対馬の観光を創る」
コメンテータ：池ノ内真一（北海道教育大学函館校）

今回セミナーに提出された刊行物は 2 点で、「図説」の 2 章は GCOE の一環でおこなわれた博物館展示の成果で、特に故・秋野豊氏を解説するものでした。それに対し、「国境の島」は現在岩下氏が取り組む「国境観光」を扱うものなので、一見すると全く異なるものですが、後者は秋野氏の「境界を砦ではなくゲートウェイにする」という考えを、岩下氏が独自に昇華・発展させたという意味において、連続性を持っています。具体的な内容ですが、前者は秋野氏の膨大な現地調査の足取りを網羅的に解説し、今日の「境界研究」の先駆者であった氏の紹介と再評価をおこなうもので、後者は対馬の国境地域の特性を生かした観光地開発の可能性を、多角的な現地調査に基づいて分析し、主に現地に向けて活性化の戦略を提言するものでした。これは花松泰倫氏（九州大学）をはじめとした研究者と実務者の共同研究に基づくものでした。「観光学」を専門とするコメンテータの池ノ内氏からは、現地の目線を踏まえたうえで「現場の真実」をいかに解消するか、そのための「問題の気づき」や「開発の仕掛け」にかかわる分析が特に評価されました。なお、出席者からは対馬観光開発の研究がスラブ・ユーラシア研究センターの守備範囲にどの程度貢献するかという疑念も出ましたが、岩下氏からは、今後対馬の事例だけではなく、他の多くのユーラシアやアメリカの国境地域の事例との比較研究をおこない、対馬もあくまでもその枠で位置づけることを目的としているという説明がありました。［野町］

2 月 27 日：**望月哲男**「『スペードのクイーン』『ベールキン物語』読書ガイド」
コメンテータ：諫早勇一（名古屋外国語大学）

今回提出されたのは、2 月に刊行されたアレクサンドル・プーシキン著『スペードのクイーン・ベールキン物語』（光文社古典新訳文庫）の巻末に収められた「読書ガイド」でした。

この「読書ガイド」は、プーシキンの生涯と創作と作品解説の 2 部構成で、前者は作品の書かれた文化的・歴史的背景を踏まえて解説するスタンダードなものでしたが、後者は欧米・ロシア・日本の様々なプーシキン研究者たちの、性質の異なる研究成果をわかりやすく解説しながら、現代における作品の読み方のさまざまな可能性を読者に提示するものでした。コメンテータの諫早氏は、まず翻訳そのものに対する評価をおこない、続いて提出された「読

書ガイド」について論じました。現代風な言葉遣いによる「読みやすさ」は、望月研究員の言語感覚の鋭さを示すもので、例えばロシア人名「マリヤ・ガヴリーロヴナ」を「マリヤ嬢」と訳したり、作品題も定番を踏襲するのではなく「スペードのクイーン（女王ではなく）」、「射弾（「その一発」ではなく）」とするなど大胆な工夫も多く見られることが議論されました。「読書ガイド」は、当時の神秘思想、賭博と時代精神、数字の意味、フリーメーソンやデカブリストとの繋がりなど、従来の解説では扱われない情報が積極的に取り上げられている点が評価されましたが、その一方で一般読者向けの古典的な情報もあった方が良いという指摘もありました。［野町］

3 月 3 日：**家田修** "What do the national censuses of 2001 and 2011 say about ethnic minorities? An introduction to a study on the Slovaks in Hungary"
コメンテータ：長與進（早稲田大学）

今回のペーパーは、長與進氏と共編でスラブ・ユーラシア研究センターから刊行予定の論文集 *Transboundary Symbiosis over the Danube: EU Integration between Slovakia and Hungary from a Local Border Perspective* No. 2 に収録予定のものです。ハンガリーでは、19 世紀末から国勢調査において言語がマイノリティの分類となっていましたが、2001 年から言語以外の複数の指標が導入され、2011 年はこれを踏まえる方法で指標の数が変わりました。この新しい手法による国勢調査ではどのような変化が観察されるか、そしてそれをもとにマイノリティはいかに類型化できるのかということを検討する内容で、特にハンガリー内のスロヴァキア人の民族意識について注目しています。家田氏によると、ハンガリーのマイノリティは、主に母語を判断基準とするタイプと、主に母語以外を判断基準とするタイプとに分かれるが、スロヴァキア人は後者に属し、民族選択において、母語よりもエスニック・アイデンティティと文化的繋がりがより重要な役割を果たすということでした。この原因として、ハンガリーのスロヴァキア人の居住地区は主に国境沿いではないため、スロヴァキア語との接触が減少しているからではないかという仮説も出されました。コメンテータの長與氏からは、国勢調査における指標の増加とその後の変更、公式マイノリティの数の意味といった国勢調査の手法と背景に関する本質的な疑問点が出され、また家田氏の仮説に対してはヴォィヴォディナのスロヴァキア人を例に討論の余地があることが示されました。会場の討論では、統計の増減だけが判断基準にはならないこと、地域レベルによる分析の必要性、世代間の意識調査の必要性、理論面も含めた先行研究との十分な突合せの必要性などが話題になりました。［野町］

3 月 18 日：**ウルフ・ディビッド** "Chiune Sugihara and the Great Eurasian Neutrality of 1939-1945"
コメンテータ：長縄宣博（センター）

今回提出されたペーパーは、カリーニングラードで刊行された論集「水晶の夜の反射に照らして：ケーニヒスベルクのユダヤ人コミュニティ、ヨーロッパのユダヤ人の追跡と救済」に掲載された論文で、同内容の国際学会のプロシーディングスに相当するものでした。一般的にも広く知られる杉原千畝の生涯と活動を、ソ連・ドイツ・日本の相互（不信の）関係の文脈から分析したもので、アーカイブ資料に限界があることを認めつつも、関係者エピソードを有効的に組み入れながら、ドイツとの緊張により杉原がビザを発給できたこと、ソ連と日本との関係改善でユダヤ人難民が日本を経由地とできたことが論じられました。「歴史はストーリー」を信条とするウルフ氏ならではの、「読ませる」テクストになっていました。コメンテータの長縄氏からは、伝記を歴史学においていかに有効に用いるかを示す好論文であると評価され、合わせてソ連史の観点から 1920 年代後半のメッカ巡礼事業、30 年代末の民族強制移住とのパラレルや、当時のアメリカやイギリスとの関係など、広い文脈から討論がおこなわれました。その一方で、既に蓄積が多い杉原千畝研究全体における本論文の位置づけや、

杉原はユダヤ人をドイツから、それともソ連から守ったのかなどといった大きな論点のみならず、杉原のハルビン学院およびハルビン領事館時代のネットワーク、「スパイ」という用語の妥当性といった比較的小さな問題まで幅広く議論されるなど、概して多くの有益な意見交換の場になりました。［野町］

3 月 20 日：**宇山智彦**「ユーラシア近代帝国論へのいざない」
コメンテータ：水谷智（同志社大学）

今回の宇山専任研究員セミナーの論文は、ユーラシア地域大国論シリーズの第 4 巻『ユーラシア近代帝国と現代社会』の序章となるもので、コラボレーター（現地協力者）論を軸としてユーラシアにおける「近代帝国」のありかたを分析および比較することを提唱するものです。なお本論文の他に、帝国論と現在の情勢を連関させることを試みる、同書の終章となる未定稿の「帝国・地域大国・小国」も参考としてあわせて議論の対象とされました。

出席者からはコラボレーター論のみならず「帝国」および「近代」そのものの規定のあり方や帝国の行動様式、帝国論とポストコロニアル論など他の理論との関係、あるいは現在における「帝国」の形などに関わる議論が提起されました。また終章が未定稿であったことから内容の展開が十分ではないとの指摘もありましたが、この点は今回の議論を反映させた完成稿において修正されるものと思われます。［仙石］

3 月 30 日：**野町素己** “The Rise, Fall, and Revival of the Banat Bulgarian Literary Language: Sociolinguistic History from the Perspective of Trans-Boarder Interactions”
コメンテータ：木村護郎クリストフ（上智大学）

今回提出されたペーパーは、トマシュ・カムセラ、野町素己、キャサリン・ギブソン共編著の “The Palgrave Handbook of Slavic Languages, Identities and Borders”（2015 年夏刊行予定）に収録される論文で、主にルーマニアとセルビアに跨るバナト地方に居住するカトリックのブルガリア人（通称バナト･ブルガリア人）の言語問題を通時的に分析する論考でした。バナト･ブルガリア人は、19 世半ばに標準語の形成を試みますが、それに至る過程、すなわちバナト地方移住以前のクロアチア語文化の影響とその継承に始まり、ハプスブルク帝国への移住後の言語状況（主にハンガリー語との関係）がいかに文章語創出に導いたかが分析され、続いてバナト地方の分割に伴って現れた異なる言語状況とその後の文章語の興亡と現状について、主に他言語との関係に焦点を当てて、社会言語学的に描き出すことを目的としていました。

コメンテータは社会言語学者の木村護郎クリストフ氏で、氏からはバナト・ブルガリア人の言語状況の通史として概ね高く評価されたものの、分析枠組みが不十分なことや用語の不統一などが特に指摘されました。セミナー出席者からは､「境界」の意味の変遷への注意やルーマニアの宗教政策の更なる分析の必要性などが指摘されました。［野町］

4 月 2 日：**越野剛**「歴史小説とナポレオン戦争：ナジェジダ・ドゥーロヴァ像の変遷を中心に」
コメンテータ：木村崇（京都大学名誉教授）

今回提出されたペーパーは、現在刊行計画中の『1812 年の祖国戦争とロシア文化』に収録予定のものでした。祖国戦争におけるナポレオンとの戦役が、ロシア小説でいかに描かれ、いかに変遷してきたかを分析することを目的とし、男装の女騎兵ナジェジダ・ドゥーロヴァのイメージを分析対象とした論考で、まず着目すべき点を挙げ（今回はドゥーロヴァという風変わりな人物)、その後に丹念にテクスト分析を積み上げる実証的な展開は、越野氏が得意とする手法です。

コメンテータの木村氏からは、本論文が長いスパンを扱いながらも、扱われる作品の細部までよく目配せしてある優れた論文と高く評価されました。なお、木村氏からは 4 ページに

わたる詳細なコメント集が配られ、「歴史小説」と「歴史」の違いに始まり、実態に基づくロシアの祖国意識、ドゥーロヴァの特徴づけの妥当性なども、実に細かく討論されました。セミナー出席者からは、ジャンル別の分析が必要なこと、ドゥーロヴァ自身の視点の位置、分析枠組み（ジェンダー論、ナショナリズム論など）の妥当性に検討の余地があることなどが指摘されました。特に『戦争と平和』の登場人物ナターシャがドゥーロヴァをモデルとしているという大胆な仮説に基づく論は、越野氏ならでは鋭い分析と評価されましたが、その一方で論文全体の構成を考えると、他のドゥーロヴァ論と比べてうまく組み込まれていないのではないかという指摘もあるなど、賛否両論でした。

概して質疑応答は非常に活発で、越野氏が目指す学際的な文学研究は、歴史研究など隣接する他分野の研究者にとっても刺激的で有意義なものという印象を与えました。［野町］

4 月 3 日：**田畑伸一郎**「油価低落と制裁下のロシア：2014 年マクロ経済実績の分析」
コメンテータ：金野雄五（みずほ総合研究所調査本部欧米調査部・主任研究員）

『ロシア NIS 調査月報』（2015 年 5 月号）に掲載予定の原稿を提出しました。これは、毎年、同誌に掲載されている前年のロシア経済実績に関する論考であり、読者は、旧ソ連・東欧地域とのビジネスに関わっている者が中心であるという説明をしました。コメンテータは、みずほ総合研究所の様々な出版物で、ロシアの経済実績を論じている金野雄五氏が務められました。報告者と金野氏の間では、ロシア経済の実績を巡って極めて頻繁に意見交換がされていますが、金野氏からは、輸出入の減少、資本流出などに関する専門的な質問が出され、その多くは、原稿の修正に直接的に貢献しました。例年と異なり、いわゆる学術誌に掲載されるような専門的なペーパーではなかったためか、出席者からは最近のロシア経済に関する幅広いコメントが沢山出され、すべての質問に答える時間がないほどでした。とくにペーパーがロシア経済の底堅さといった表現でプラスの面を強調した点に関心が集中し、そうしたしたたかさは、どういう要因によるものなのか（政策によるのか、外的要因によるのか）、これこれのネガティヴな面をどうして重視しないのか、今後の経済の見通しが甘くないかなどといった質問・コメントが多く出されました。［田畑］

◆　研究会活動　◆

ニュース 140 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。ただし、今号で独立して紹介したものは省略します。［大須賀］

1 月 31 日　国立民族学博物館共同研究会「聖地の政治経済学：ユーラシア地域大国における比較研究」
望月哲男「世俗聖地としてのロシア地主領地：ヤースナヤ・ポリャーナを中心に」；**韓敏**（国立民族学博物館）「近代中国の聖地作り：指導者ゆかりの場所を事例に」

2 月　1 日　中・東欧研究会発足記念講演会　**井上寿一**（学習院大）「日本の国際連盟外交：スラブ・ユーラシア世界の成立と日本外交」

2 月　2 日　プロジェクト型共同研究報告会　**志田仁完**（一橋大）「不足、非公式市場、家計貯蓄：ソ連構成共和国の実証分析、1965-1989」；**日臺健雄**（埼玉学園大）「コルホーズ市場における取引内容と住民生活：1930 年代後期スヴェルドロフスク州の事例を中心に」

2 月　3 日　プロジェクト型共同研究報告会　Konstantin Lifanov（モスクワ大、ロシア）«Язык восточнословацких публикаций в США и механизм его создания»; **長與進**（早稲田大）«Об употреблении восточнословацкого литературного языка в городе Прешов в 1918-1919 гг.»

2 月　4 日　Bojan Belić（ワシントン大、米国）“To Standardize, Or Not To Standardize: That Is the Question”（SRC 特別セミナー）
梶山祐治（ロシア国立人文大）「アレクセイ・ゲルマンの映画における文学的コンテクストと視覚的モチーフ」（鈴川中村奨励研究員研究報告会）

2 月 10 日　**田村容子**（福井大）「1950 年代の中国プロパガンダ芸術におけるソ連の表象：連環画にみる『蘇聯展覧館』の記憶」（客員研究員セミナー）

2 月 12 日　**梶山祐治**（ロシア国立人文大）「過剰な視覚的イメージ：ストルガツキー兄弟『神様はつらい』からアレクセイ・ゲルマン『神々のたそがれ』へ」（ユーラシア表象研究会）

2 月 16 日　サハリン樺太史研究会　**井澗裕**「北サハリン軍事占領期の亜港パクロフスカヤ教会堂をめぐって」；**丹菊逸治**（北大アイヌ・先住民研究センター）「絵葉書資料の中のサハリン（樺太）と少数民族」；**植田展大**（東京大）「戦間期日本における水産物消費：北海道・樺太漁業との関係を中心に」
大野斉子（宇都宮大）「ロシアの香りの文化を拓く：シャネル№.5 と帝政ロシアの香水産業」（SRC セミナー）

2 月 26 日　Andrew Wachtel（中央アジア・アメリカ大、キルギスタン）“Nation Building in Central Asia: Kyrgyzstan between Manas and Kurmandjan-Datka”（SRC 特別セミナー）

2 月 27 日　**亀田真澄**（東京大）「コスモヴィジョン：ソヴィエト有人宇宙飛行のプロパガンダ」（ユーラシア表象研究会）

2 月 28 日　**風戸真理**（北星学園大）「モンゴル・ゲルの標準化と可変性」（北海道中央ユーラシア研究会）

3 月 5-6 日　プロジェクト型共同研究：「近代ロシア・プラトニズムの学際的研究」による「プラトンとロシア」研究会　**坂庭敦史**（早稲田大）「シェヴィリョフの文学史とギリシャ古典」；**堀江広行**（株式会社 JRB Inc.）「初期セルゲイ・ブルガーコフの一連のドストエフスキー論によせて」；**渡辺圭**（千葉大）「現代ロシア正教聖職者における神智学批判」；**北見諭**（神戸市外国語大）「持続の知性化とアンチ・プラグマティズム：セミョーン・フランクのベルグソン解釈をめぐって」；**斎藤祥平**（北大院）「ニコライ・トルベツコイのユーラシア主義について」；**兎内勇津流**（センター）「『スチェファン・ヤヴォルスキーとフェオファン・プロコポーヴィチ』に見るユーリー・サマーリンのキリスト教観」

3 月　6 日　第 12 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会　**デイヴィッド・ウルフ**（センター）「ハルビン駅へ：日露戦争・交錯するロシア満洲の近代史」

3 月　9 日　Turganbek Allaniiazov（ジェズカズガン大、カザフスタン）「マングシュラク（カザフスタン）、カラクーム（トルクメニスタン）における反ソ暴動（1931 年 4 月～ 9 月）〔ロシア語〕」（SRC 特別セミナー）

3 月 16 日　プロジェクト型共同研究：スラヴ文献学シンポジウム『賢者アキルの物語』：中世スラヴ文学への新たなアプローチ　Aleksandr Bobrov（ロシア科学アカデミー）“The Story of Akir the Wise in the Musin-Pushkin Collection”; **服部文昭**（京都大）“The Russian Recension of the Story of the Wise Akyrios, Reconsidered”; Anica Vlašić-Anić（古代教会スラヴ語、クロアチア）“The Croatian Glagolitic Story of Akir the Wise (Slovo Premudrosti Akirově: An Intertextual ‘literary Kaleidoscope’”; **三谷惠子**（東京大）“Rewriting the Wisdom Words: The Slavic Recensions of the Story of Akir the Wise”; **太田敬子**（北大文）“Aḥīqar al-Ḥakīm: The Story of Akir the Wise as a Heritage of the Middle East”

3 月 17 日　**佐々木史郎**（国立民族学博物館）「人類学民族学博物館所蔵の千島アイヌの木綿衣：博物館資料から見えてくるロシア・千島・北海道・日本を繋ぐ人とモノの交流」（客員研究員セミナー）

3 月 19 日　ニーデルハウゼル著『総覧：東欧ロシア史学史』「チェコの章」輪読会

3 月 23 日　**吉開将人**（北大文）「20 世紀中国における歴史地図集の編纂と国際関係：中ソ関係を中心に」（北海道中央ユーラシア研究会）

3 月 24 日　共同研究班報告会・客員研究員セミナー　**佐藤隆広**（神戸大）「ロシアとインドの中央地方財政関係：比較のための予備的考察」；**大野成樹**（旭川大）「石油価格、株価および為替レートの相互関係：ロシアに関する分析」；**田畑朋子**（センター共同研究員）「近年のロシアの人口動態」；**田畑伸一郎**（センター）「2014 年のロシア経済」

3 月 28 日　International Workshop “Economic Growth of Economies in Transition in Comparison: from the Perspectives of Value Added Generation and Productivity”　P. Hare（ヘリオット・ワット大、UK）“The Political Economy of Growth and Governance”; P. Bhattacharya（同）“The Role of Institutions: Lessons from History”; Kim, B.-Y.（ソウル大、韓国）“The Performances

of Chinese Firms in North Korean Trade: Evidence from Firm-Level Data"; **久保庭真彰**（一橋大）"Comparative Growth Accounting of Russia and China by Sector"; **中村靖**（横浜国立大）"Productivity Growth in Russia and China"

3 月 31 日　**松里公孝**（東京大）「ウクライナ動乱：クリミアとドネツクの視点から」（客員研究員セミナー）

4 月 20 日　Viktor Larin（極東諸民族歴史・考古学・民族学研究所、ロシア）「21 世紀初頭の太平洋ロシアとアジア・太平洋地域におけるロシア の利益と政治〔ロシア語〕」（UBRJ セミナー）

4 月 27 日　**古川泰人**（北大農）「ディスカッション！ GIS（地理情報システム）を人文・社会科学研究に活用するには？」（SRC セミナー）

人事の動き

◆　非常勤研究員・学術研究員紹介　◆

菊田　　悠　2015 年 4 月に着任（非常勤研究員）

研究テーマ：中央アジア定住社会の文化人類学的研究

高橋美野梨　2015 年 4 月に着任（学術研究員）

研究テーマ：北極圏島嶼部の自治研究、現代北欧政治、ヨーロッパ国際政治

なお、昨年度に非常勤研究員に着任した金山浩司さんは、引き続き今年度も留任されます。辛嶋博善さんは任期満了し共同研究員となりました。［編集部］

◆　2015 年度の客員教授・准教授　◆

公募していました客員教授･准教授は審査の結果、次の 7 名の方々にお願いすることになりました。［編集部］

氏名	所属	研究テーマ
Alexander Bukh	筑波大学・人文社会科学系	Soviet Public Diplomacy and National Identity: The Internal and the External Orients
木村　護郎クリストフ	上智大学外国語学部	境界研究における越境コミュニケーションの位置づけと課題：ドイツ・ポーランド国境の事例から
小森　宏美	早稲田大学教育・総合科学学術院	ソ連・バルト三国関係の表象：歴史教科書の記述を中心に
澤田　和彦	埼玉大学教養学部	「ブロニスワフ・ピウスツキ評伝」の執筆
日臺　健雄	埼玉学園大学経済経営学部	スターリン体制下コルホーズ農民の労働と余暇：1930 年代後期スヴェルドロフスク州の事例を中心に
藤代　　節	神戸市看護大学看護学部	シベリアの少数民族の言語生態について：20 世紀初頭のトゥルハンスク北部域のドルガン語の形成とその後
古川　浩司	中京大学法学部・大学院法学研究科	北海道・ロシア（サハリン州）の地方間交流の比較分析

◆　事務職員の異動　◆

西村信毅事務長、乾優紀子係長は転出されました。

転入者紹介：成澤顕久事務長、熊坂浩係長。［事務係］

イェジ・トレデル教授（1942-2015）を悼む

野町素己（センター）

グダンスク大学文学・歴史学部の教授を長く務めたイェジ・トレデル (Jerzy Treder) 氏が、2015 年 4 月 2 日に他界されました。享年 72 歳でした。トレデル氏はカシュブ語研究の泰斗で、特にカシュブ語とポーランド語の慣用句研究で業績を多くあげられ、また 1981 年に刊行され、今でもよく引用される「カシュブ文法」の著者の 1 人として知られていますが、実際には、文字通りカシュブ語・文学の「百科事典」であり、言語研究だけではなく、19 世紀から 21 世紀までのカシュブ文学の分析やテクストの校訂、またステファン・ラムウトの古典から最新のエウゲニウシュ・ゴウォンベックまで、さまざまなカシュブ語辞書の編纂作業など、極めて広範な領域の重要なお仕事を、数えきれないくらい成し遂げられました。しかも、社会主義時代からカシュブ語（当時はポーランド語カシュブ方言）の正書法確立に積極的に取り組むなど、学者であると同時にカシュブ文化の保持と発展にも尽力された方で、ある意味活動家としても重要な役割を果たしたと言えます。これだけの功績を遺したカシュブ語研究者はこれまでにいませんでしたし、これからも現れないように思います。それだけに教授のご逝去の衝撃は甚大で、極めて残念です。私が先生とお付き合いできたのは 10 年間という比較的短い時間でしたが、それでも先生から享受した恩恵は計り知れません。以下、トレデル先生への追悼の念を込めて、先生との思い出を書きたいと思います。

在りし日のトレデル教授と筆者。ヴェイヘロヴォにて

私がトレデル教授に初めてお目にかかったのは 2005 年 6 月なので、今からちょうど 10 年前です。当時ワルシャワ大学講師を務める傍ら、ポーランド学部の授業を聴講していました。スラブ方言学のヤヌシュ・シャトコフスキ先生の講義でカシュブ方言テクストを講読したのですが、その時に出てきたポーランド語と異なる動詞形態に興味を持ちました。先行文献が割と少なかったこともあり、ぜひ自分の見解を専門家に聞いていただきたいと思い、トレデル先生に手紙を書きました。途中から連絡手段がメールに変わり、6 月 7 日に先生から頂いたメールには、カシュブ語で「今度グダンスク大学で会いましょう。今年の 6 月 23 日 12 時に 149 番教室でお待ちしています」と書かれていました。学者には難しい人が多いので、実は大変恐ろしい人だったらどうしようと、顔が見えない相手に手紙で偉そうに自分の研究を開陳したことを少し後悔しつつ、恐る恐る指定の場所に行ったことが今もはっきりと思い出されます。トレデル教授は、同じくカシュブ語研究で著名なエドヴァルド・ブレザ教授、マレク・ツィブルスキ准教授とともに私を迎え入れ、私の話を一通り聞いてくださり、多くの著書もいただきました。お会いしてみると大変気さくな方で、私の心配は杞憂に終わりました。その年の秋にトルンで行われたスラブ語研究の学会でトレデル氏に話したポーランド語とカシュブ語の迂言的動詞形式の比較について発表し、それをもとに論文を書き、ポーランド語研究の専門誌「ポーランド語」に投稿、2006 年に掲載されました。原稿はもちろんトレデル

先生にもお見せしたのですが、反応はあまり良くなく、正直関心をお持ちでない印象を受けたので、やや残念に思いました（なお、その原稿を幾度となく読み、掲載に至るまで厳しい助言をくださったのはポーランド語統語論研究で著名なクリスティナ・ピサルコヴァ教授でしたが、残念なことに彼女も2010年に他界されました）。また、私のインフォーマントが必ずしもトレデル氏と良い関係にないこともあり、氏とのあいだに微妙に距離感ができましたが、それでも関係が絶たれることはありませんでした。

私がセンターに着任したのは2008年ですが、その年にポーランド文学の小椋彩氏他と地域研究コンソーシアムの「次世代ワークショップ」でポーランドの地域主義に関するワークショップを組織することになりました。そのワークショップにトレデル氏を招聘し、カシュブ語文化の現状と課題についてお話いただこうということで話を進めていましたが、最終的にはご都合が合わず、来日されませんでした。しかしその代わりに「カシュブ語を巡る最新状況」と題した原稿をお送りくださいました。それを当時授業でご一緒していた宮崎悠氏（北海道教育大学函館校）が丁寧に日本語に翻訳してくださったので、ワークショップでは私がその訳稿を代読しました。

トレデル先生は、私との距離感を感じ取っておられ、またそれを気にしていたようで、むしろ先生の方から私に積極的に働きかけてくださることがあったように思います。例えば、最近はどんな研究をしているかと聞かれたので、センターで『スラブ人から見たロシアとロシア人：言語・文学・文化1』という論文集の企画があることを告げると、19世紀のロシア人研究者のカシュブ研究の功績に関する英語論文「ピョートル・プレイス、イズマイル・スレズネフスキイとカシュブ」をすぐにご寄稿くださいました[(1)]。

また、ごく一部の人にしかカシュブ来訪を連絡していないのに、なぜか先生が「あなたはカシュブにもうすぐ来るらしいですね」とご連絡くださり、お目にかかったことも数回ありました。今から思うと私が連絡すべきだったとも考えますが、その一方、今風に言うならば、「サプライズ」がお好きな先生であったようにも思います。私の先生への私信が私の知らないうちにカシュブの雑誌『ポメラニア』に掲載されたこともありました。「サプライズ」の最たるものは2011年5月におこりました。先生はご自宅に呼んでくださり、カシュブ語の代名詞や20世紀初頭の方言学者フリードリヒ・ロレンツの研究手法について話された後、「ところで『パン・タデウシュ』のカシュブ語訳[(2)]が出たので、明日あなたに一冊あげたいと思います。大学に置いてありますから、明日グダンスク大学に来てください」と言われたので、翌日私がその通りに大学に行くと、その日に大学で自分の講演会があることをそこで初めて知ったということがありました。「何を話せばよいのでしょうか」と伺うと、「私が話を振るから自由に話してください。心配しないでください」としかおっしゃいません。グダンスク大学の学生や先生が集まっていて、所詮小規模とはいえテレビ局やラジオ局も来ているし、引くに引けない状態で多少恨みにも思いましたが、それでも私の話を興味深く聞いてくださる様子を見ると、いかに自分を気にかけてくださっているのかとも思えてきました。

先生に最後にお目にかかったのは昨年の5月でした。ポズナニでの学会の後、カシュブ地方に数日調査に行った時のことです。メールで先生が「ヴェイヘロヴォの博物館で会いましょう」とおっしゃるので、お約束通りに博物館に行くと、先生は握手した直後にノートパソコンをいきなり開き「あなたと約束した仕事が滞っている。これは問題だ」と語気を荒げ、そのテクストを私に見せて早口に指示を出されました。先生は「私は病気です。見てわかるでしょう。そして非常に忙しい」とおっしゃいました。実際、随分やつれておられたので、ご機嫌が悪かったのは病気に多忙が重なったのだろうと漠然と思いましたが、今から思うに、病魔が既に先生のお身体を蝕んでいて、近い将来のことをお考えだったのかもしれません。

先生の最後のご著書となった『カシュブ語の基礎知識』（2014）は、大変珍しいカシュブ語

による学術書です。「カシュブ語が標準語として確立するには、様々な文体の存在が必要です。でも学術書はほとんどないのです」と生前仰っていましたが、それが実現したものです。その著書の中で、私が 2 回言及されています。そのうち 1 回には「マイコフスキの文法書は野町（札幌）が刊行する予定である」と書いてあります。これは博物館のアーカイブで見つけた、20 世紀初頭に活躍した作家アレクサンデル・マイコフスキが遺した文法書の原稿のことです。「手稿とタイプ稿を比較し、コメントをつけて刊行する」という約束があったのですが、私には大変荷が重いので何度かお断りを試みました。そもそも先生がお一人で取り組まれた方が確実と思いましたし、今でも思っています。しかし「この重要な仕事は、あなたなら成し遂げられますし、あなたにぜひやっていただきたい」と言って、私の話に耳を貸す様子はありませんでした。その後、しぶしぶ原稿を見直しはじめ「遅れていますが、お約束通りこの仕事に取り組んでいます」とメールで報告すると、先生からは「心配しないでください。ポーランド語では『仕事は兎ではないから逃げない』と言うではありませんか」とご返事をいただいきました。その言葉に油断していたところに、先生の訃報が飛び込んできたので、約束が果たせなかったことへの責任感で目の前が真っ暗になりました。

最後の面会のときに、なぜ私のような言葉もおぼつかない外国人を信頼できるのか不思議に思って先生にお伺いしました。先生は「あなたはカシュブのことをすべて知っているわけではありませんね。でも私だってそうなのです。あなたはスラブ語学者だから普通のカシュブ語学者とは違う視点でカシュブ語を見ることができる。だから、お互いに勉強していけばいいのではないですか」と言われたのが印象に強く残っています。目を閉じると、そうおっしゃっている先生の笑顔と声が蘇ります。その時に日本への講演旅行もお引き受け下さり、楽しみしてくださっていた様子も思い出されます。実現できなかったこと、残念なことを数えてもきりがありませんが、今後も自分の視点で研究を続けることがカシュブ研究への貢献となり、それがきっと先生への恩返しになると思います。トレデル先生への感謝の気持ちを込め、心から先生のご冥福をお祈りする次第です。

---

1 この論文は、次のリンクで読むことができます。
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/slavic_eurasia_papers/no3/06_Treder.pdf

2 この翻訳について、Acta Slavica Iaponica 33 号に Hanna Popowska-Taborska 教授の書評が掲載されていますので、ご興味をお持ちの方はご一読ください。

学　界　短　信

◆　言語学は地域研究にいかに貢献するか？　◆
第 9 回国際中欧・東欧研究評議会（ICCEES）世界大会の隠れた見どころ

野町素己（センター）

2015 年 8 月 3 日（月）～ 8 日（土）まで、上記の国際会議が千葉県の幕張市で開催されます。センターニュースの読者の方々には、上記の日本語訳よりも、ローマ字で ICCEES とするか、あるいはカタカナでイクシーズと書いたほうが馴染み深いかもしれません（なお、カタカナでは検索しないほうが良いと思います）。それ程この国際会議の存在は日本のスラブ・ユーラシア研究者の間で急速に親しまれるようになりましたが、それには 2009 年札幌に始まり、2010 年ソウル、2011 年北京、2012 年カルカッタ、2013 年大阪とおこなわれてきた ICCEES アジア地方大会の影響もかなりあるでしょう。今回の大会は史上初のアジア開催で、参加予定者

の規模も現時点で2000人近くいるようです。ヨーロッパからもアメリカからも遠い日本は地理的に不利だと思っていましたが、これまでの実績と信頼に加え、恐らく日本という物珍しさも手伝い、これまでに引けを取らない規模の大会になりそうです。現在、この歴史的な大会の成功を目指し、下斗米伸夫（法政大学）、沼野充義（東京大学）両委員長、そして嘗ての同僚である松里公孝（東京大学）事務局長を筆頭に、組織委員一丸となって準備を進めています。

私は今大会の組織委員会を務めていますが、これまで特にICCEESに積極的に参加したというわけではなく、2009年の札幌地方大会と2010年のストックホルム大会に参加した程度で、しかも上述の松里氏に促されて、という感じです。というのは、私の専門はスラブ諸語文法研究という実に地味な分野なのですが、これは国際関係、歴史、経済、文化などといったスラブ・ユーラシア地域研究の「王道」からは大分遠い分野だからです。ASEEESやBASEESなどの地域研究系の学会でも同じことを感じますが、こういった学会においてスラブ言語学や言語学一般のパネル全体の数は少なく、決してメイン・ストリームにはなりません。言語学パネルで立ち見が出ることはまず考えられず、それどころか報告者以外に誰もいないことがあっても、それは極端に驚くことではありません。ICCEESで特別パネルが企画されるようなこともありません。事実、私が2010年にストックホルムで組織した二つのパネルのうちの一つには、バルカン言語学のAndrej Soboljev氏のような、（その道の）大家が複数いたにもかかわらず、聞きに来たのはわずか一人でした。では、スラブ言語学自体が周辺的な学問で、研究者の数が一般に少ないかというと、少なくとも世界レベルで見れば、無論それは違います。通常、スラブ語学者は専門家が集まる欧米・ロシアのディシプリン別の学会に参加しているわけで、あえて乱暴に言えば、わざわざ専門家の数が少なく、得られることが少ないであろう地域研究系の学会に率先して参加する必要はないのです。

その一方で、日本のスラブ語研究に目を移した場合、現状でその規模は比較的小さく、最も大きいロシア語学を含めても、上記のディシプリン別の国際学会を招致することは難しいと思われます[(1)]。実際、私はここ数年間の間にあるスラブ言語学の国際学会の招致を考えて、その幹部の方々と相談したことがありますが「そもそも日本に受け入れる母体となる国際的なスラブ語研究の組織、そして十分な数の研究者がいるのでしょうか」と尋ねられ、正直やや返事に困りました。日本にも先人が築いてこられた強固な土台は確実にあり、研究者も一定数いますが、では、今日十分に国際化しているか、国際舞台で活躍している研究者が十分な数いるのかと正面から問われると、現状で肯定的な答えは難しいかもしれません。尤も、本場の欧米やロシアでさえも、伝統的な文学部のスラブ学科は人員削減などの縮小傾向にあり、学科閉鎖も珍しくないので、ロシア語学やスラブ語学を専攻して就職するのは至難の業です。ですから、欧米・ロシアよりはるかに需要の小さい日本で、欧米・ロシアに一目置かれるような十分な数の専門家が存在し、さらに今後育成すること自体、残念ながら現実的ではないようにも思います。こういった状況の改善は永遠の課題です。いずれにせよ、今回ICCEESが日本で開催されることにより、様々なスラブ語研究領域で活躍する研究者たちの発表を一度にたくさん見ることが可能になります。規模や分野に偏りはありますが、小規模のスラブ言語学会の一つが来るようなものとも考えられるでしょうか。そして、自分も同じ舞台で発表できるということで、特に若手にとっては、文字通り自分の肌で国際化の意味を感じる絶好の機会になり、今後の本邦のスラブ語研究の新展開に繋がるのではないかと思います。

さて、本題に戻り、こういった地域研究系の学会における言語学の報告が、言語研究者や他の地域研究者にどういった意味があるかということを少し考えてみたいと思います。そもそも、一口に「言語学」といっても、かなり性質の違う領域が多数あります。大雑把に言って、まず言語構造そのものを研究する分野（音韻論、形態論、統語論など）がありますが、これはその分野の専門家ではないと、理解しがたいことが多いかもしれません。また特別な理論

に依拠したもの（例えば非常に抽象的な言語理論に基づくものなど）は、仮に同じ言語を研究対象として扱っていても、その理論に精通していないとまるで歯が立たないということが珍しくありません。こういった分野は、他の地域研究者との対話はなかなか難しいでしょうし、そもそも関心を持たれないかもしれません。

その一方で、言語とその外の世界との関わりを巡る研究分野もあります。社会言語学はまさにその典型的な領域で、文字通り、言語を社会との関わりから分析する分野です。社会言語学自体が多くの研究領域を含みます。例えば、社会において、性別や社会階層の差異も含めて、個々人がどのように言語を使用するか、同じ言語が異なる地域でどのように使い分けられるか、また多言語使用と言語の選択について、どの言語を国家語とするかといった政治的な側面も入ります。もちろん、言語は宗教などとともに、民族の有力なアイデンティティ・マーカーになりえますから、いかに言語が民族形成に役割を果たしてきたか、果たしているかという問題も盛んに議論されます。さらに、批判的談話分析のように、談話の分析を通じて権力やイデオロギー性を明らかにしていく分野もあります。

こうなると言語学も、文学はもちろんですが、政治学、歴史学、宗教学、文化人類学とつながってくる、実に学際的研究の可能性に満ちた分野であるということが、専門家以外にも容易に見えてくると思います。そしてこういった研究は、ディシプリン別の学会ももちろんありますが、それに加えて地域研究系の学際的な学会での他分野との意見交換が非常に有益だと考えられます。

さて、ICCEES のプログラムを見てみますと、言語学関連では、4 月 17 日現在、パネル提案が 8 件、統合パネル（個人提案を束ねたもの）が 7 件、ラウンドテーブルが 2 件、合計 17 件あります。このうち 10 件程度が、上に述べた言語と言語外の事象を扱う研究発表に該当します。独断と偏見で一部パネルやラウンドテーブルの題目をご紹介しますと、例えば米国の優れたウクライナ語学者である Andriy Danylenko 氏が組織している「帝国の影の中で：ウクライナにおける言語政策」、在イギリスのロシア系言語学者 Lara Ryazanowa-Clarke 氏組織の「ロシア政治の談話における言語的暴力」、ドイツで活躍する若手のセルビア人研究者 Aleksandra Salamurović 氏が組織する「南スラヴおよび旧ユーゴスラヴィア諸国における言語景色と文字の表象」などは、昨今の現地の政治・社会状況に鑑みても、上で述べた意味において、言語学者のみならず様々な聴衆にとって興味深い研究報告になると想像されますし、言語分析を通して地域の特性を明らかにするという意味において、地域研究に貢献すると言えるでしょう。

なお、今回の大会では、言語それ自体を扱う研究でも注目に値するパネルがあります。例えば、三谷惠子氏（東京大学）組織の「転写・翻訳・変形：中世スラブの手稿における隠されたダイナミズム」です。スラブ世界において、かつては言語研究（特に古文書研究）、文学研究、さらに歴史研究は、「フィロロジー」という枠で本来密接に繋がっていましたが、今日では細分化が進み、言語学、文学、歴史学と分かれるのが常です。このパネルは、これまでの研究蓄積と各分野の理論面における発展を踏まえたうえで、これらの分野を再連結する、今日の視点で学際性がある画期的なパネルと言えるかもしれません。

以上、周辺的なスラブ語研究の立場から今回の ICCEES 大会の一側面について述べてみました。大会開催まであと少しですが、組織委員として、またスラブ・ユーラシア地域研究の拠点に所属する言語研究者の 1 人として、今回の ICCEES 大会が、言語研究者も含めたあらゆる分野の研究者、そしてスラブ・ユーラシア研究の学際的発展にとって、大変意義深い催しとなることを祈っています。

1　もちろん、ICCEES はスラブ・ユーラシア地域が対象ですから、北方諸言語、コーカサス諸言語、チュルク諸語、ウラル諸語、アルタイ諸語を専攻する研究者も実際に含まれますが、私の印象では、こういった領域の言語学者は、（一般）言語学科で叩き上げられたある意味「真の言語学者」であることが多く、

かつての所謂「フィロロジー」に端を発し、文学、歴史学と部分的に運命を共にしてきた伝統ある「スラビスティカ」出身のスラブ諸語研究者とは、若干性質が違うところがあるように思います。したがって、ICCEES に非スラブ語学の言語学者が参加しないことは驚くことではありません。なお、余談ですが、日本のスラブ語研究は言語単位の「縦割り」が目立ちますから、「スラブ語学専攻」と自称する研究者の中にも、どれか一言語、しかもスラブ諸語の十分な知識は一切なく、例えばロシア語の文法カテゴリー一つを生涯研究している人もいます。その一方で、私がスラブ圏を含めて複数回留学して思い知ったのは、欧米のスラブ語学者は研究対象が複数言語が当然ということ、そして学部レベルからスラブ諸語と狭義のスラブ学全体を叩き込まれていることです。私は自分の卒業大学と現在の勤務先以外は特に詳しく知りませんが、それでも日本ではこういった教育は十分におこなわれていないという印象です。したがって、日本で「スラブ語学専攻」と一口に言っても、実は欧米・ロシアのそれと意味するところが、いまだに大きく違うのが実情でしょう。もちろん、ロシアの場合には「スラブ語学」と言った場合に「ロシア語以外のスラブ諸言語の研究」という含意がある場合もありますが、これはまた別の話です。

◆　北京にスラブ研究センター　◆

開所式にて

北京の首都師範大学に、このたび新しく北京スラブ研究センター（北京斯拉夫研究中心）が誕生しました。人文系のスラブ学を主眼とした組織で、中国俄語（ロシア語）研究会会長の劉利民教授が主任委員、中国俄羅斯（ロシア）文学研究会会長で社会科学院研究員の劉文飛教授と首都師範大学副校長の邱運華教授が副主任委員という、錚々たる陣容。このセンターには同時に、ペテルブルグのロシア科学アカデミーロシア文学研究所（プーシキン館）の支部（俄羅斯普希金之家北京文部）も併設されるので、委員には同研究所所長でアカデミー会員のフセヴォロド・ヴァグノ氏も名を連ねています。他の委員の中には、かつてわがスラブ研の外国人研究員を務めた中国社会科学院の李静傑学部委員（中国俄羅斯東欧中亜研究会会長）、ハーバード大学ロシア・ユーラシア研究センター（デイヴィス・センター）所長のテリー・マーチン教授、モスクワ大学名誉教授のジョルジュ・ニヴァ氏、雑誌『オクチャブリ』編集長のイリーナ・バルミョートヴァ氏なども含まれています。4 月 17 日には同大学で開所式が賑々しくおこなわれ、ヴァグノ氏らとともに望月哲男も日本のスラブ・ユーラシア研究センターを代表して列席し、文字通り中国の中心にできた新しい研究センターの誕生を祝いました。ちなみに同センターの略称 BSRC のロゴマークデザインは、我々のセンターのものと大変よく似ています。近い将来に両センターの協力関係が開かれることを願っています。

このことに関連して、中国ロシア文学会会長、中国社会科学院ロシア文学研究部門長、北京スラブ研究センター学術主任　劉文飛氏から日本の同僚への手紙が届いていますので、以下抄訳します。［望月］

私たち中国のロシア文学研究者は、日本の同僚から多くを学び、深い敬意を抱いてきました。私自身プーシキンを専門とする関係で、たとえばプーシキンの『大尉の娘』の

最初の中国語訳が、実際には日本語訳のコピーだったことを存じております。つまり初期のロシア文学の中国語訳は、オリジナル言語からではなく、日本語を介しておこなわれたのです。魯迅によるゴーゴリ作『死せる魂』訳も、同じく日本語からなされました。

近年、ロシアや中国やその他の場所でおこなわれる国際学会で日本の皆様にお目にかかる機会が増え、私自身も何人かの高名な日本の研究者と親しくおつきあいいただいておりますが、そうした方々の深い学識と活発な学術活動に、強い感銘を受けております。思うに、中国と日本のロシア学者が共有する言語は単にロシア語のみではありません。東洋文化や東洋的世界感覚自体が、共通言語になっているのです。私たちがたがいに助け合い、今後ますます学術上の協力関係が深まっていくことを願っております。

つい最近、私たちは北京スラブ研究センター（北京斯拉夫研究中心）および北京プーシキン館（北京普希金之家）を設立しました。ともに首都師範大学の中に設けられた施設ですが、決して中国の研究者ばかりでなく、広く世界各国の学者に開かれたもので、もちろん日本の研究者の方々も大歓迎です。是非研究にいらしてください。ご来訪をお待ちしております。

敬具
劉文飛（Лю Вэньфэй）
2015 年 5 月 4 日　北京にて

◆ ロシア科学アカデミー・スラブ学研究所主催「第 13 回バルカン学会」開催される ◆

2015 年 4 月 7 日（火）～ 9 日（木）まで、標記の国際学会がモスクワでおこなわれました。主催者のスラブ学研究所とセンターは 2006 年に協定を結びましたが、その後、積極的な学術交流は実現していませんでした。2011 年に GCOE「境界研究の拠点形成スラブ･ユーラシアと世界」（岩下明裕代表）における共同研究で同研究所のイリーナ・セダコワ博士（南スラヴ民族言語学）が来日された際に、宇山センター長（当時）を交えて今後の交流の活発化について議論しました。セダコワ氏は 2 年毎に開催される上記の学会への参加を提案されましたが、それが今年になって実現しました。

学会のようす（セダコワ氏撮影）

この学会は、同研究所の類型論・比較言語学部門の言語文化研究センター「バルカン学」が組織するもので、1990 年に始まりました。バルカン半島はまさに文明の十字路で、歴史的に多民族・多言語地域としてよく知られています。この学会は言語研究を中心に、さまざまな領域の専門家が集まり、多角的にバルカン世界について討論することを目的としたもので、世界的によく知られているヴャチスラフ・イヴァノフ、ウラジミル・トポロフ、タチヤナ・ニコラエワ、タチヤナ・ツィヴィヤンといった研究者たちによって立ち上げられました。

これまでは主にロシア・東欧の研究者が参加していたようですが、最近は西欧やアメリカの研究者も多く参加するようになりました。今回は、上記のセダコワ氏の取り計らいがあり、初めて日本から 3 名の研究者が参加しました。まずはセンター関係者との交流ということでしたが、センター共同研究員で日本を代表するスラブ語学者で、現在は主に文献学の分野で活躍される三谷惠子氏（東京大学）、近年センター関係の数多くの研究会に関わっておられ、旧ユーゴスラヴィアのメディア研究で注目される亀田真澄氏（東京大学）および野町が研究報告をおこないました。

この学会は毎回共通テーマがありますが、今回は「バルカンのシソーラス『開始』」がそれでした。3 日間で 34 の研究報告があり、どの報告の後もほぼ例外なく議論が白熱するという、実に活気あふれる学会でした。南スラヴ圏の「賢者アキル」の写本の文献学的研究の三谷報告および旧ユーゴスラヴィアを中心とした共産圏における英雄像の比較をおこなった亀田報告は、大変高く評価され、日本のバルカン・南スラヴ研究の水準の高さと分野の多様性を示すことができたと思います。尚、私はコソヴォのスラヴ人ムスリムの言語問題について話しましたが、思いの他反応があり大変収穫になりました。詳しいプログラムは、次のリンクをご参照ください。http://www.inslav.ru/sobytiya/2011-2015-balkanskie-chtenija-13［野町］

◆ 「北極科学サミット週間」参加記 ◆

高橋美野梨（センター）

2015 年 4 月 23 日～ 30 日の 8 日間、北極科学サミット週間（ASSW: Arctic Science Summit Week 2015）が富山国際会議場にて開催されました。ASSW は、国際北極科学委員会主催の北極研究にかんする国際会議であり、1999 年のノルウェー・トロムソを皮切りにこれまで計 16 回開催されています。国内では今回の富山が初めての開催です。共同主催は日本学術会議、共催として国立極地研究所、北海道大学、海洋研究開発機構、北極環境研究コンソーシアムが名を連ねています。

期間中は、国際北極科学委員会関連会合などのビジネスミーティングに加えて、第 3 回国際北極科学計画会議（ICARP III）および第 4 回国際北極研究シンポジウム（ISAR-4）での研究報告がおこなわれました。ICARP III / ISAR-4 には、高円宮妃久子さまをお迎えした開幕式と閉幕式、計 3 回の基調講演・全体会議、ポスター発表（180 本）に加えて、69 のセッションがマルチトラック式に立てられ、世界から約 700 名の北極研究者が参加し、約 350 本のプロポーザルが提出されました。

私は、ICARP III/ISAR-4 に報告者として参加しました。同時に、他のセッションを聴講することもでき、北極研究の「現在地」を確かめる大変貴重な時間を過ごすことができました。特に、自然科学の北極研究者だけでなく、人文社会科学の北極研究者・実務者が世界から集まり、研究成果や今後の研究計画について発表をおこない、学術的貢献を果たした今回の ICARP III/ ISAR-4 は、北極研究が自然科学者の専売特許ではないという至極当たり前のことを確認する場となったようです。現在の人文社会科学系北極研究は、研究者各々の関心に依存する形で進展しており、パッチワーク（つぎはぎ）的な部分があることは否めません、自然科学に比して研究の蓄積が十分ではない人社系北極研究の底上げは確実に図られていることも、今回の ASSW を通して確認することができました。

例えば、2007 年刊行の単著『Arctic Promise: Legal and Political Autonomy of Greenland and Nunavut』（University of Toronto Press）以降、北極研究を牽引し続けるナタリア・ロウカチェヴァは、様々な領域でその重要度を高める北極の「持続可能性（Sustainability）」（ブルントラント報告で提起された概念）に着目し、先行するいくつかの研究を整理した上で、同概念をいかに北極に適用させていくかという問題に挑戦しました。アラスカ、カナダ、グリーンランド、チュクチに居住する北方先住民の権利保護を謳うイヌイット環極北会議のカール・オールセンは、北方先住民族の「伝統的知見」と「科学（Western science）」とをどのように接合させていくかという視点から、持続可能な開発や北極の持続可能性を問いました。私が発表をおこなったセッション「Arctic governance, sustainable development of local communities and non-arctic state's contribution」でも、デンマーク・ノルウェー・フィンランド・ロシア・米国・ドイツ・日本の北極研究者による活発な議論がおこなわれました。私の報告は、北極圏島嶼部のデンマーク領グリーンランドの自治の構造を明らかにすると同時に、自治論

それ自体の刷新を試みるものです。現地語の資料を最大限活用し、当該地域の政府機関や高等教育機関でのインタビュー調査、さらには極地開発に参画する資源開発会社でのインタビュー調査で得た知見を盛り込みながら議論を展開し、自治論それ自体の研究史と個別具体的な地域の自治史とを明らかにすることで、自治の在り方を実証し、考察することを目指しました。

ASSW にて

当セッションには、池島大策（早大）、田畑伸一郎（SRC）、後藤正憲（SRC）、大西富士夫（日大）（発表順）といった北極研究を牽引する研究者も登壇し、国際学会における日本のプレゼンスを高めることに貢献しました。立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。また、セッション外では、私が尊敬してやまない岸上伸啓（民博／総研大）、高倉浩樹（東北大）、礪波亜希（コペンハーゲン大）、林直孝（カルガリー大）（五十音順）の各氏が、報告者として、モデレーターとして、あるいはフロアから ASSW の議論に大きく貢献されていたことを強調したいと思います。

他方で、多数のセッションを聴講し、各国の研究者と意見交換する中で、研究の課題も浮き彫りになりました。それは、自然科学と人文社会科学との「棲み分け」をいかに解消していくかということと同時に、方法論（例えば、演繹的研究―帰納的研究）が異なる研究者同士の対話をどのようにして促進させていくか、という課題であります。例えば、人文社会科学の研究者で北極を演繹的に研究する者は、一国の北極戦略を検証することで北極の秩序形成の可能性を提示したり、国家戦略の比較研究をおこなうことで各国の戦略傾向をあぶりだしたりするような研究をおこないます。資金・技術提供の観点から、非北極圏諸国の動きが注目される昨今、日本、中国、韓国、インド等の北極戦略やその意味付けを検証するものもあります。他方で、帰納的に研究する者は、ステークホルダーとしての生活者（主に北方先住民族）に焦点をあて、彼らがどのような考えに基づき、特定の課題と向き合い、行動しているのかを明らかにしようとします。イヌイット・ガバナンスの在り方を実証的に問うと同時に、彼らの自己決定権の実効的ビジョンを提示しようとする研究もあります。問題は、北極海域の動態をいかに理解し、実効性のある解決策（これは政策提言的なものもあれば、概念提起型の理論研究もあります）をアウトプットできるかという問題意識は多くの報告者に共有されているものの、演繹的研究と帰納的研究の成果をどのように架橋し、「総合人文社会科学」として北極にアプローチし、且つ自然科学との「統合（Integration）」を果たしていけるかという点には、（自戒の念も込めて）無自覚であったというところにあります。会議最終日に発せられた「大会声明（Toyama conference statement）」には、北極研究の統合に向けたロードマップの概観が提示され、近代学問の脱-制度化を目指し、北極研究におけるディシプリン、スケールおよび多様な知の体系をいかに統合する（Integrating）かがキーワードとなっていることからも、これは北極研究全体のタスクであると同時に、ASSW が請け負わなければいけない課題として認識されているといえるでしょう。

現在の北極研究に求められているのは、学問の論理的整合性を追求していくことと同時に、学と学との関係性に力点を置く方法論の検討なのかもしれない。分野内での棲み分けを解消させ、自然科学分野をも射程に入れる対話プラットフォームの構築を目指す上で、ASSW が担う役割は極めて大きいといえます。

なお、ASSW の次期会議は、2016 年に米国・フェアバンクス、2017 年にチェコ・プラハにて開催される運びとなっています。

◆ 学会カレンダー ◆

2015 年 6 月 27-28 日 日本比較政治学会 2015 年度研究大会　於上智大学　http://www.jacpnet.org
7 月 30-31 日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム
8 月 3-8 日 ICCEES 第 9 回大会　於幕張 http://www.l.u-tokyo.ac.jp/makuhari2015/
10 月 30 日 -11 月 1 日 日本国際政治学会 2015 年度研究大会　於仙台国際センター
http://jair.or.jp/index_j.html
10 月 31 日 内陸アジア史学会 2015 年度大会　於京都外国語大学
http://nairikuajia.sakura.ne.jp/SIAS/
10 月 31 日 -11 月 1 日 地域研究コンソーシアム年次集会　於東京外語大学
11 月 7-8 日 日本ロシア文学会第 65 回定例総会・研究発表会　於埼玉大学
http://yaar.jpn.org/　　比較経済体制学会全国大会　於日本大学
11 月 19-22 日 ASEEES（スラブ東欧ユーラシア学会）第 47 回年次大会　於フィラデルフィア市
http://www.aseees.org
11 月 28 日 ロシア・東欧学会 2015 年度研究大会　於上智大学 http://www.gakkai.ac/roto/
12 月 10-11 日 スラブ･ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム（兼センター設立 60 周年記念行事）

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。［大須賀］

大学院だより

2014 年度、大学院文学研究科スラブ社会文化論専修では、5 名が修士課程を修了しました。また、井上岳彦さんが「仏教国としてのロシア帝国：二つのカルムィク人社会に関する考察」という論文で、斎藤祥平さんが「N.S. トルベツコイの思想と亡命ロシア人世界：ユーラシア主義を中心に」という論文でそれぞれ課程博士号を取得しました。皆さんの諸方面での活躍をお祈りしています。

4 月には、修士課程 5 名（加えて研究生 2 名）、博士課程 2 名の新入生を迎えました。今年度の大学院生およびスラブ研究センター研究生は以下の皆さんです。［長縄］

2015 年度スラブ社会文化論専修大学院生名簿

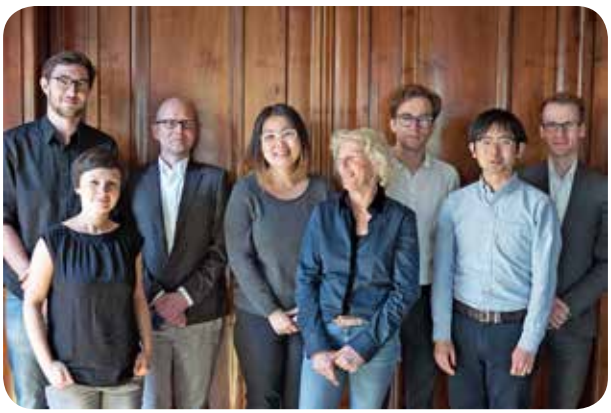
学年	氏名	研究題目	指導教員	副指導教員
D3	大武由紀子	アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス	望月	越野
D3	秋月準也	ミハイル・ブルガーコフと 20 世紀初頭のロシア文学	越野	望月
D3	松下隆志	現代ロシアのポストモダン文学	望月	越野
D3	長友謙治	ロシアの穀物輸出国としての発展可能性	山村	田畑
D3	アセリ・ビタバロヴァ	中央アジア諸国・中国間関係における相互認識	岩下	宇山
D3	ヤン・ファベネック	オホーツク海域及びその沿岸地域をめぐる現代の地政学	岩下	田畑
D2	小野瑞絵	旧ソ連圏におけるイスラーム教育と政策の比較	宇山	長縄
D2	服部倫卓（みちたか）	ロシア・ウクライナ・ベラルーシの対 EU 経済関係	田畑	山村
D1	生熊源一（いくま）	戦後ロシア美術	越野	望月
D1	アリベイ・マムマドフ	北方領土問題とナゴルノ・カラバフ紛争の比較	岩下	田畑
M2	古川雅規	ロシア語とチェコ語の接頭辞の比較研究	野町	望月
M2	植松正明	戦間期エストニアの議会政治と農地改革	長縄	家田
M2	真弓浩明	北方領土問題における重層的アプローチの模索	岩下	宇山
M2	李欣燭（リキンショク）	中国とロシアにおける対外経済制度改革に関する比較研究	田畑	山村
M2	アブドゥルアジズ・カマロフ	日系企業のロシアにおける人的資源経営	田畑	山村
M2	川淵華子	帝政ロシア末期における小ロシア地域のナショナリズム	長縄	宇山
M2	金盾	ロシア東部地域における日系小売業の発展の可能性	田畑	山村
M2	長谷川さゆり	ロシアの国防費と軍の近代化	田畑	山村

M2	卞 曉 歓（ベンショウカン）	国際金融危機におけるロシアと中国の対応策の比較	田畑	山村
M1	ミルラン・ベクトゥルスノフ	ソヴィエト政権初期のキルギスにおける民族エリート	宇山	長縄
M1	北村宣彦	ロシア・ファシズムの提唱者としてのイワン・イリイン	越野	ウルフ
M1	イーゴリ・コワリョフ	日露間のスポーツ交流の実状と展望	田畑	岩下
M1	武藤鉄太	帝政ロシアのナショナリズム：古儀式派の視点から	長縄	宇山
M1	佐々木祐也	ロシア語におけるドイツ語由来の借用語	野町	越野
研究生	ニルファル・カロンゾダ	中央アジアの紛争	宇山	
研究生	上村正之	現実のカザークに対する文学上のイメージ	越野	

大学院修了者の声

ミュンヘンにて札幌を思う

斎藤祥平（ルートヴィヒ・マクシミリアン大学［ミュンヘン大学］客員研究員／日本学術振興会海外特別研究員）



ミュンヘン大学ロシア・アジア講座のメンバーと（右から２人目が筆者）

ドイツ・ミュンヘンに到着して二週間になろうとしている。私はスラブ・ユーラシア研究センターで学び、ポスドク研究をこうして始めることができた。スラ研で勉強できて、本当に良かったと思っている。指導教員のウルフ先生や副指導教員の望月先生を筆頭に、ここで私に関わってくださった、全ての方に感謝している。名前を挙げると、本当に全ての方になってしまうので、大変恐縮ながら割愛させていただくが、スラ研の先生、研究員、事務員の方々、大学院の先輩、同輩、後輩には、様々な形で助けていただいた。さらに、多くの研究会が開かれ、北海道にいながら国内外の研究者と知り合う機会があった。他方で、研究報告や研究調査のための出張をさせていただいたが、それを可能にする大学院生への補助制度もあった。こうして得た知見は、これから研究を続けていく上でも大きな財産だ。

私の進路に関して言えば、世界の一線で活躍する先生や研究員、諸先輩の背中を見ていたことに加え、ITP（インターナショナル・トレーニング・プログラム）など外国語での研究報告を支援するプログラムや外国人研究員制度が備わっていたことが大きい。在学中も、北大の交換留学制度でモスクワ大学、GCOE 境界研究教育プログラムでウィーン大学、チェコ政府奨学金でマサリク大学に滞在したことから、卒業後の進路のひとつとして、海外でポスドク研究をおこなうことを自然と考えていた。なお、現在の受け入れ研究者のひとりは、チェコからアメリカに学会発表に行った際、空港のロビーで知り合った方である。

受け入れ先のミュンヘン大学大学院東欧・南東欧研究科 Graduiertenschule für Ost- und Südosteuropastudien には、地元ドイツに加え、ハンガリー、ルーマニア、ポーランド、スロヴァキアといった近隣諸国から優秀な大学院生が集まっている。のみならず、ロシアやアメリカからも研究員を招いている。とても良い刺激を受けると同時に危機感もある。大学院

での研究は終えたが、すでに新しい勝負が始まっている。ここでは、日本人としての立場や視点が激しく求められる。それがなければ、存在意義はないとすら思えることもある。そしてドイツでは、日本よりもゆったりと時間が流れているように感じる。そのぶん、何よりも「質」が求められる。この国が重厚な伝統によって培ってきた優れた学問環境に加え、政治と学問の微妙な関係に関する教訓ゆえかもしれない。

それに応えることができるのか。自分が持っているものをなんとか絞り出すしかないだろう。日本で教わったことが身にしみると同時に、この国から学ぶことは多いと考えている。履かせていただいていた下駄は日本に置いてきてしまった。今はヨーロッパの固い石畳をひたすら歩くしかない。実際に足の裏にできているマメが、やがて固くなるように努めたいと思う。夢中になれるものを見つけることができたこと、それを続けることができること、それはとても幸せなことだ。私を送り出してくれた人たちに心から感謝したい。ありがとうございました。（2015 年 4 月 12 日）

ビビビ！っときた、あの瞬間を信じて

井上岳彦（北海道大学大学院文学研究科専門研究員）

私の場合、大学院修了までに 11 年という月日が必要でした。その間に多くの方に出会うことができました。人との出会いこそ、この 11 年間のすべてです。私には感謝の言葉しか出てきません。なかでも宇山智彦先生には本当に感謝するばかりです。半ば呆れていらっしゃったと思いますが、宇山先生が温かく見守ってくださらなかったら、私は博士課程を終えることはできなかったでしょう。その他にも、ここですべての方のお名前を挙げることはできませんが、スラ研の先生、研究員、事務職員、院生の皆さん、本当にどうもありがとうございました。皆さんのご支援なくしては、今の私はなかったと思います。

さて、これからスラ研に入り研究することを考えている皆さんに対して、私がお伝えできるのは個人的な体験だけです。恥かしい体験談から何かを感じ取ってくだされば と思います。大学院の記憶も 11 年分もあると簡単には思い出せないのですが、それでもやはり強く印象に残っているのは最初の留学のことです。平成 18 年 12 月 12 日から平成 19 年 12 月 6 日までの 1 年弱、私はロシア連邦カルムィク共和国エリスタ市に留学しました。この留学はもっとも楽しく、そしてもっとも辛いものでした。そのころ個人的な事情で意気消沈していた私は、起死回生を期し借金をしてエリスタに旅立ちました。ところが当時は円安・ルーブル高で（平成 19 年の年平均レートは、1 ルーブル＝約 4.6 円）、私費留学生にはかなり厳しい状況でした。無計画もいいところです。食費を浮かしすぎて、次第に私は精神的にも苦しくなっていきました。たしかに、ひもじかったです。月に一度大学の食堂で食事するのが私のささやかな楽しみでした。大学から寮の代わりにあてがわれた予防診療所にひとり隔離され、最初の数カ月は友達も出来なかったこともあるでしょう。いい歳をして枕を濡らす日も少なくありませんでした。

なにより辛かったのは（今はとても楽しい）文書館でした。地方役人の文字は、どの角度から眺めても「ミミズ」にしか見えませんでした。毎日「ミミズ」を眺めて、トボトボと家路につく日々が続きました。研究しに来たのに、ロクに史料も読めません。その冬カルムィキアの研究者は、ほとんど文書館に来ることはありませんでした。一週間で閲覧者が私一人のときもありました。おそらく 90 年代に誕生した民族研究者の数が飽和状態になり、ロシアの好景気も手伝って若手研究者が生まれにくかったのだと思います。カルムィク人研究者から、「エリスタのアーカイヴ史料なんかを読んでも、もはや何も得るものはない」というようなことをしばしば言われ、悔しく思ったのを今でも思い出します。そもそもカルムィク人です

らカルムィク人の歴史の重要性を信じていない状況で、私のような若造に何ができるのだろうか。それが当時の最大の悩みでした。それから春が到来し、友達ができ、良き先生にめぐりあうことができました。このときにできた関係は、今でももっとも強固なものです。これがとても辛く、しかしもっとも楽しい最初の留学でした。

カルムィキア・日本友好協会「ひまわり」にて、日本語を教えました（2009 年、右か筆者）

けっきょく何が言いたいのかと申しますと、どんなに暗闇にいようとも必ず朝はやってくるということです。11 年かけて大学院を出ることはまったくお勧めしませんが、気長に取り組む姿勢も必要なのではないでしょうか。厳しい局面もあるでしょう。しかし自身の研究テーマに出会ったときの、あのビビビ！っという瞬間を忘れずに、その時の熱い想いを信じて、研究を続けてください。そしてちゃんと食事をとり、健康に常に気を遣うことをおすすめします。これが私から皆さんへのメッセージです。どうもありがとうございました。（2015 年 4 月 15 日）

図書室だより

◆　ロシアの eBook　◆

欧米の出版界においては、近年電子出版が盛んになり、特にアマゾンが 2007 年にキンドルという端末を発売して以後、急速に普及してきた。現在では、娯楽書ばかりでなく、教養書、大学教科書、学術書にも及びつつあるのはとっくに周知のことであろう。

その一方で日本では、これまで何度も「電子出版元年」が唱えられてきたことに象徴的されるように、いろいろな事業が企画されてきたものの、現時点においては、情報流通のメインストリームとして多くの人々に受け入れられるまでには至っていない（本の所有者が自らその内容をスキャンして電子化する「自炊」といわれる行動の盛行は、その需要と供給のミスマッチを示している）。

さて、ロシアの出版物の流通事情がよろしくないことは、ソ連が崩壊して以後、多くの紆余曲折を経ながら、続いていることである。eBook は、こうした状況を変えるポテンシャルがあるはずであるが、まだそうなってはいない。eBook を事業として成立させるためには、個々の出版社の力では限界がある。デジタル化したものは、品質の劣化なしにいくらでもコピー・保存可能となるため、その利用をコントロールしつつ、適切な代価を徴収する仕組みをつくることは容易でないのである（これは日本も同じ。欧米でも配給元は寡占状態である）。

しかし、最近、こうした状況が変わりつつあることを感じる。ひとつは、主に地方の学術出版物であるが、ネットからダウンロードできることが多くなりつつあること、もうひとつは、複数の出版社の電子版書籍を提供するプラットフォームが用意されつつあることである。

前者は、販売にこだわった場合、出版物の利用が広がらないことのマイナスを重視しての措置であろう。版元が自らおこなっている場合と、一部ではあろうが海賊版的な場合があるようだ。

わたくしが偶然気付いた、ごく狭い範囲のことであるが、次のようなものがある。

・http://www.kamlib.ru/library.php?page=res3_gavrilov_vik
　Вопросы истории Камчатки. Вып. 1-6 (2005-2012)

・http://www.rusinst.ru/
　Институт русской цивилизации の出版物。ロシア思想関係のものが多い。著作権は大方切れているのであろうが、出版業と両立するとは考えにくいので、どこかが補助金を出しているのであろうか。

・http://lib.rgo.ru/dsweb/HomePage
　Вестник をはじめとするロシア地理学協会の出版物。

後者に属するものとしては、

・http://elibrary.ru/defaultx.asp
　学術書、論文の検索サイト。一部は無料でダウンロード可能のもよう。いわば CiNii のロシア版。登録を要する。ロシア科学アカデミー民族・人類学研究所が出版物を無料提供の情報。海外代理店は MIPP か。購読契約モデルが各種あるもよう。

・http://www.eastview.com/products/books
　収録されているのは、最近の出版物が多い。中国なども入っていて、ロシア語およびウクライナ語出版物の収録件数の合計は 3,240 点だった（5 月 13 日現在）。
　価格は、日本の代理店から本を買うより安い場合が多い傾向。たとえば、『日本年鑑 Японский ежегодник』2014 年版は 12 米ドル、『東欧の中世国家 Древнейшие государства Восточной Европы』2005 年版は 31 米ドルとある。

以上の動きは、出版物を入手する側としては、基本的にはありがたいものだが、有料の場合、せっかく契約しても、電子版があることが効率的に利用者にわかる仕組みがないと、宝の持ち腐れとなりかねない。また、先方の都合でいったん公開されたコンテンツが消失したり改竄されたりする危険もある。これはもちろんこれはロシアに限った話でないのだが、何かそれを防止する仕組みができるかどうかに注目すべきであろう。

センター図書室では、これまでロシアのデータベースの契約はあっても、電子書籍、電子ジャーナルの契約はしてこなかったが、今後、検討する価値があるように感じている。［兎内］

◆　「極東ロシア・シベリア所蔵資料ギャラリー」の拡充　◆

WEB メニュー

この 3 月、上記ウェブサイトに、北サハリン保障占領に関係する写真帖 2 冊、および参謀本部作成樺太 2 万 5 千分の 1 地形図の一部を追加収録しました。

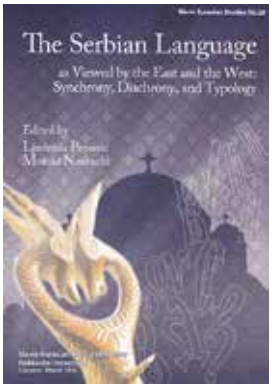
今回、追加収録した写真帖は、野坂保雄『薩哈嗹州紀念寫眞帖』（1923 年：附属図書館北方資料、写真帖 418）、および、三菱合資会社の北樺太ドゥエ炭坑を記録した写真帖『極光』（1924 年：本センター図書室特別保管、資料番号 1380403460）です。

地図は、昨年 8 月のセンターニュース 138 号で紹介した地図のうち、1924 年にオハ付近を測量した 8 枚で、これまでのところ、本センター以外に所蔵が確認されていない図幅です。

また、『薩哈嗹州紀念寫眞帖』巻末の地図は、地図コーナーに重複収録して、使いやすくしました。サイトの URL は、http://srcmaterials-hokudai.jp/ です。［兎内］

編集室だより

◆ Slavic Eurasian Studies 28 ◆
The Serbian Language as Viewed by the East and the West: Synchrony, Diachrony, and Typology の刊行



SES28 号は、昨年 2 月 5 日にベオグラード大学（セルビア）と本学との協定に基づいておこなわれた同タイトルのシンポジウムの研究報告がもとになっている論文集（L. Popović、野町素己共編）ですが、さまざまな事情で参加できなかった研究者の論考も含んでいます。

本論集のコンセプトは、東西文明の十字路であるバルカン半島に位置し、歴史的に「東」と「西」の間で揺れ動いてきたセルビアの文化的特徴を、言語学からのアプローチで分析し、明らかにすることを目的としたものです。これ自体は大変大きなテーマで、実に多角的な学際的研究が必要な領域です。本論集の分野は一言で言語学とまとめられますが、社会言語学、言語的世界像研究、語源学、言語接触論、文字論、地域言語学、対照言語学、言語類型論など実に多様なアプローチがとられており、テーマの多様性と問題の複雑性を提示し、今後のさらなる展開を期待させる論集になったと思います。表紙の素晴らしいデザインはセンターの笹谷氏によるものです。なお、ベオグラード大学では 2015 年 5 月 29 日に本論集のプロモーションが予定されています。本論文集の内容は以下の通りです。http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish/no28_ses/index.html［野町］

◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 No.7 ◆
『ロシア SF の歴史と展望』の刊行

上記の報告集（越野剛編）が年度末に刊行されました。サイトの URL は、http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/slavic_eurasia_papers/no7/index.html です。［編集部］

◆ スラヴ研究 ◆

『スラヴ研究』第 62 号は、審査の結果、以下の原稿を掲載することになりました。現在、最終の校正作業を進めています。今号は総力戦についての特集を組むと予告していましたが、なんとか第二次世界大戦の記憶をめぐるものにまとめることができました。掲載数が増えたことも喜ばしいことです。

〈特集：第二次世界大戦の記憶をめぐって〉

橋本伸也　反ファシズム英雄から戦争犯罪者への転落と反転：コーノノフ裁判とヨーロッパの歴史・記憶紛争
立石洋子　現代ロシアの歴史教育と第二次世界大戦の記憶
宮崎悠　書評論文：タデウシュ・エプシュタイン『リンゲルブルム・アーカイヴ調査目録』ワルシャワ、2011 年

〈論文〉

下里俊行　近代ロシア正教聖職者教育におけるプラトン主義の起源：ペテルブルク神学大学招聘教授フェスラー追放事件を中心に
貝澤哉　グスタフ・シペート「解釈学とその諸問題」における解釈学的哲学の構想：意味の社会的存在論にむけて
北見諭　全一体におけるイデア的なものと時間的なもの：セミョーン・フランクの『知識の対象』におけるフッサールとベルクソン

松下隆志　身体なき魂の帝国：マムレーエフの創作における「我」の変容

〈研究ノート〉

長沼秀幸　19 世紀前半カザフ草原におけるロシア帝国統治体制の形成：現地権力機関と仲介者のかかわりを中心に

久岡加枝　ヴァレリアン・マグラゼ（1923-1988）によるメスヘティ民謡の復元：雪解け以降のグルジアにおけるフォーク・リヴァイヴァルと関連して

岩本和久　近代ロシア文学におけるスポーツ表象の変遷：トルストイからトリーフォノフまで

藤井陽一　フルシチョフと教皇ヨハネ 23 世の首脳外交

丁寧な査読をしてくださったレフェリーの皆様に御礼を申し上げます。残念ながら不採用となった方も、次回以降ぜひ再挑戦して下さい。次の第 63 号の原稿締め切りは、2015 年 8 月末の予定です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。［長縄］

◆ *Acta Slavica Iaponica* ◆

Acta Slavica Iaponica 第 36 号は校正作業が最終段階を迎え、近日中に刊行予定です。37 号の締め切りは 2015 年 7 月 15 日です。どうぞ奮ってご投稿ください。以下は第 36 号の目次です。［野町］

〈Articles〉

Аркадий Блюмбаум　К генезису и семантике «мирового оркестра» в творчестве Александра Блока: несколько уточнений

Борис Ланин　Философские идеи Василия Гроссмана

Beatrice Penati　On the Local Origins of the Soviet Attack on "Religious" *Waqf* in the Uzbek SSR (1927)

〈Research Notes〉

Нона Шахназарян　Антикоррупционные меры в контексте реформы дорожной полиции в Армении: революция, эволюция или фасад

〈Book Reviews〉

Maxim Makartsev　K. Lindstedt, Lj. Spasov, J. Nuorluoto, eds., *The Konikovo Gospel. Коникoвско евангелие*. Bibl. Patr. Alex. 268. Helsinki: Societas Scientarum Fennica, 2008 [Commentationes Humanarum Literarum 125]. lxxxii+440 pp. with illustrations

Matsumae Moyuru　Evgenia Davidova, *Balkan Transitions to Modernity and Nation-States: Through the Eyes of Three Generations of Merchants (1780s–1890s)* [Balkan Studies Library volume 6]. Leiden and Boston: Brill, 2013, xvii+223 pp.

◆ 境界研究 ◆

『境界研究』No. 5 が年度末に刊行されました。サイトの URL は、http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/JapanBorderReview/no5/index.html です。［編集部］

会　議（2015 年 2 月）

◆ センター協議員会 ◆

2014 年度第 4 回　2 月 6 日（金）

議題
1. 客員教授・准教授の選考について
2. 名誉教授の推薦について
3. 教員の人事について

4. 規程の改正について
5. 大学間交流協定について
6. 部局間交流協定の締結について
7. 研究生の受け入れについて
8. その他　　［事務係］

みせらねあ

◆ 論文集 *Grammaticalization and Lexicalization in the Slavic Languages* ◆ が Otto Sagner 社より刊行される

これは 2011 年 11 月 11 日～ 13 日にセンターでおこなわれた国際会議「スラブ諸語における文法化と語彙化」の研究報告に基づく論文集です。本会議は国際スラビスト会議スラブ語文法構造研究部会委員の研究報告が中心でしたが、部会委員以外の日本・欧米の研究者も参加し、報告者は合計 15 か国から 25 名で、しかもそのうちの多くが世界トップクラスの研究者という、文字通り本邦初の大規模で重要なスラブ語研究の会議となりました。

編集作業はプレドラグ・ピペル（セルビア科学芸術アカデミー）、アンドリイ・ダニレンコ（ペース大学）、野町（センター）の 3 人でおこないました。各編集者の方針の違いが大きく、その作業は大変難航しましたが、結果として著名な出版社 Otto Sagner 社から出版することが出来ました。なお、表紙のデザインは、センターの笹谷氏によるもので、キリル文字の Г は「文法化（грамматикализация）」を、Л は「語彙化（лексикализация）」を表したものです。本論集につきましては、以下のサイトをご覧ください。
http://www.kubon-sagner.de/opac.html?query=9104&filter=product:ottosagner［野町］

◆ センターの役割分担 ◆

2015 年度のセンター専任教員の役割分担は、以下の通りです。［田畑］

センター長 ..... 田畑
副センター長 ..... 岩下
拠点運営委員会委員 ..... 田畑／岩下／宇山／仙石／山村

【学内委員会等】
教育研究評議会、部局長等連絡会議 ..... 田畑
教務委員会 ..... 田畑
創成研究機構連絡会議 ..... 田畑
低温科学研究所運営委員会 ..... 田畑
図書館委員会 ..... 仙石
観光学高等研究センター運営委員会 ..... 岩下
社会科学実験研究センター運営委員会 ..... 山村
情報法政策学研究センター運営委員会 ..... 家田
情報ネットワークシステム学内共同利用委員会 ..... 山村

北方生物圏フィールド科学センター運営委員 ..... 山村
オホーツク環境ネットワーク ..... 田畑
環境負荷低減推進員 ..... 山村
国際担当教員 ..... ウルフ

【学外委員会等】

国立大学附置研究所・センター長会議 ..... 田畑
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会 ..... 田畑
JCREES 事務局 ..... 田畑／高橋
地域研究コンソーシアム理事 ..... 田畑
地域研究コンソーシアム運営委員 ..... 野町／長縄
人間文化研究機構地域研究推進委員 ..... 宇山
京都大学地域研究統合情報センター拠点運営委員 ..... 岩下
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員 ..... 宇山

【センター内部の分担】

大学院講座主任..... 宇山
教務委員..... 長縄
入試委員..... 山村
総合特別演習担当（前期）宇山/（後期）仙石
全学教育科目責任者..... 長縄
全学教育科目総合講義..... 長縄/野町/田畑/仙石/地田
全学教育科目演習..... 越野
将来構想..... 岩下/宇山/仙石/長縄
点検評価..... 仙石/長縄
夏期シンポジウム..... 長縄/高橋
冬期シンポジウム..... ウルフ/望月
図書..... 仙石/兎内
情報・広報..... 越野/高橋/大須賀
予算..... 仙石
共同利用・共同研究公募..... 山村
客員教員..... 山村
外国人研究員プログラム.....山村/ウルフ/大須賀
du Quenoy, Paul ..... 長縄
Kirmse, Stefan..... 長縄
Korkut, Mehmet ..... 家田
Prior, Daniel ..... 宇山
Kim, Soo Hwan ..... 越野
非常勤研究員..... 越野
鈴川・中村基金..... 家田
60 周年記念行事..... 望月
公開講座..... 宇山／高橋
研究会・講演会（専任研究員セミナーを含む）
.....野町/地田/高橋/大須賀
研究所・センター公開..... 地田
その他諸行事企画..... 越野/地田/高橋
雑誌編集委員会..... 長縄/野町/宇山/ウルフ/越野/仙石
Acta Slavica Iaponica..... 野町/ウルフ/大須賀
『スラヴ研究』..... 長縄/大須賀
Eurasia Border Review ..... 岩下
『境界研究』..... 地田
スラブ・ユーラシア叢書、SES、研究報告集
..... 望月/大須賀
ニューズレター和文（メルマガ･HP コンテンツ）
..... 望月/（田畑）/大須賀
ニューズレター欧文（メルマガ･HP コンテンツ）
..... 越野/ウルフ/（田畑）/大須賀

◆　人物往来　◆

ニュース 140 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。

［田畑／大須賀］

1 月 31 日　河合洋尚（国立民族学博物館）、川口幸大（東北大）、小林宏至（東北大）、杉本良男（国立民族学博物館）、韓敏（国立民族学博物館）、前島訓子（国立民族学博物館）、松尾瑞穂（新潟国際情報大）
2 月　1 日　井上寿一（学習院大）、梶山祐治（ロシア国立人文大）
2 月　2 日　志田仁完（一橋大）、日臺健雄（埼玉学園大）
2 月　3 日　Konstantin Lifanov（モスクワ大、ロシア）、長與進（早稲田大）
2 月　4 日　Bojan Belić（ワシントン大、米国）

2 月 16 日　植田展大（東京大）、大野斉子（宇都宮大）
2 月 19 日　池ノ内真一（北海道教育大函館校）
2 月 26 日　Andrew Wachtel（中央アジア・アメリカ大、キルギスタン）
2 月 27 日　諫早勇一（名古屋外国語大）、亀田真澄（東京大）
3 月　3 日　長與進（早稲田大）
3 月 5-6 日　北見論（神戸市外国語大）、坂庭敦史（早稲田大）、堀江広行（株式会社 JRB Inc.）、渡辺圭（千葉大）
3 月　9 日　Turganbek Allaniiazov（ジェズカズガン大、カザフスタン）
3 月 16 日　Aleksandr Bobrov（ロシア科学アカデミー）、Anica Vlašić-Anić（古代教会スラヴ語、クロアチア）、服部文昭（京都大）、本田晃子、三浦清美（電気通信大）、三谷惠子（東京大）
3 月 20 日　水谷智（同志社大）
3 月 24 日　Marjan Markovik′（スコピエ聖キリルとメトディウス大、マケドニア）、大野成樹（旭川大）
3 月 28 日　P. Bhattacharya（ヘリオット・ワット大、UK）、P. Hare（同）、Kim, B.-Y.（ソウル大、韓国）、久保庭真彰（一橋大）、中村靖（横浜国立大）
3 月 29 日　Zbigniew Greń（ワルシャワ大、ポーランド）、Romuald Huszcza（同）
4 月　2 日　木村崇（京都大名誉教授）
4 月　3 日　金野雄五（みずほ総合研究所）
4 月 20 日　Viktor Larin（歴史学・人類学・民族学研究所、ロシア）

◆　研究員消息　◆

岩下明裕研究員は 2014 年 11 月 28 日～ 12 月 2 日の間、科学研究費による国際シンポジウム “CASS Forum & Southwest Forum 2014” 出席及び現地調査のため、中国に出張。1 月 28 日～ 2 月 6 日の間、科学研究費による研究打合せ及び調査のため、米国に出張。2 月 28 日～ 3 月 6 日の間、科学研究費による国際ワークショップ “Living between the Rolling Hills and the High Himalayas” 出席のため、インドに出張。3 月 15 ～ 17 日の間、地域を創るボーダースタディーズに関する現地調査及び打合せのため、韓国に出張。

家田修研究員は 2015 年 1 月 2 ～ 15 日の間、チェルノブイリ研究情報視察および意見交換のため、ドイツ、デンマーク、イギリス、フランスに出張。3 月 4 ～ 18 日の間、ワークショップ “Energy Transitions around the World” 出席及び意見交換、資料収集のため、ドイツ、デンマーク、ウクライナに出張。4 月 7 ～ 13 日の間、科学研究費による “57th ABS/WSSA Annual Conference” 出席及び研究打合せのため、米国に出張。

ウルフ・ディビッド研究員は 1 月 13 ～ 20 日の間、資料収集のため、米国に出張。4 月 8 ～ 18 日の間、環オホーツク環境研究ネットワークの構築に関する “57th ABS/WSSA Annual Conference” 出席及び資料収集のため、ロシア、米国に出張。

山村理人研究員は 2 月 8 ～ 16 日の間、ロシア農業の構造変動とその地域展開に関する調査のため、ロシアに出張。

田畑伸一郎研究員は 2 月 21 ～ 28 日の間、ヘルシンキオフィス運営業務のため、フィンランドに出張

越野剛研究員は 3 月 2 ～ 8 日の間、科学研究費による現地調査のため、台湾に出張。

仙石学研究員は 3 月 6 ～ 17 日の間、科学研究費による資料収集のため、ポーランド、ドイツに出張。

野町素己研究員は 4 月 6 ～ 13 日の間、科学研究費による第 13 回バルカン学会「バルカンのシソーラス『開始』」出席及び研究打合せのため、ロシアに出張。、5 月 3 ～ 12 日の間、国際学会「クロアチア統語論研究会」出席及び研究打合せのため、セルビア、クロアチアに出張。

望月哲男研究員は 4 月 15 ～ 18 日の間、北京スラブ研究センターロシア科学アカデミー文学研究所（プーシキンの家）北京支部設立記念大会出席のため、中国に出張。［事務係］

目　次

研究の最前線 1

GCOE プログラム「境界研究の拠点形成」が最高評価を得る／ 2015 年度夏期国際シンポジウム “Russia and Global History” の予告／共同研究員／公開講座「動乱のユーラシア：燃え上がる紛争、揺れ動く政治経済」開催中／国際セミナー「ロシア北極圏の持続的発展」の開催／国際シンポジウム “Slavic Minorities and Their (Literary) Languages in the European Context and Beyond: The Current Situation and Critical Challenges” 開催される／マリヤン・マルコヴィッチ教授のマケドニア語に関する連続講演会／ワルシャワ大学の研究者来訪／UBRJ: Association for Borderlands Studies 年次大会開催される／専任研究員セミナー／研究会活動

人事の動き 14

非常勤研究員・学術研究員紹介／ 2015 年度の客員教授・准教授／事務職員の異動

イェジ・トレデル教授（1942-2015）を悼む by 野町素己 15

学界短信 17

言語学は地域研究にいかに貢献するか？第 9 回国際中欧・東欧研究評議会（ICCEES）世界大会の隠れた見どころ／北京にスラブ研究センター／ロシア科学アカデミー・スラブ学研究所主催「第 13 回バルカン学会」開催される／「北極科学サミット週間」参加記／学会カレンダー

大学院だより 24

ミュンヘンにて札幌を思う by 斎藤祥平 25

ビビビ!っときた、あの瞬間を信じて by 井上岳彦 26

図書室だより 27

ロシアの eBook ／「極東ロシア・シベリア所蔵資料ギャラリー」の拡充

編集室だより 29

Slavic Eurasian Studies 28 *The Serbian Language as Viewed by the East and the West: Synchrony, Diachrony, and Typology* の刊行／スラブ・ユーラシア研究報告集 No.7『ロシア SF の歴史と展望』の刊行／スラヴ研究／ *Acta Slavica Iaponica* ／境界研究

会議 30

センター協議員会

みせらねあ 31

論文集 *Grammaticalization and Lexicalization in the Slavic Languages* が Otto Sagner 社より刊行される／センターの役割分担／人物往来／研究員消息

2015 年 5 月 29 日発行

編集責任　大須賀みか
編集協力　望月哲男
発行者　田畑伸一郎
発行所　北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/